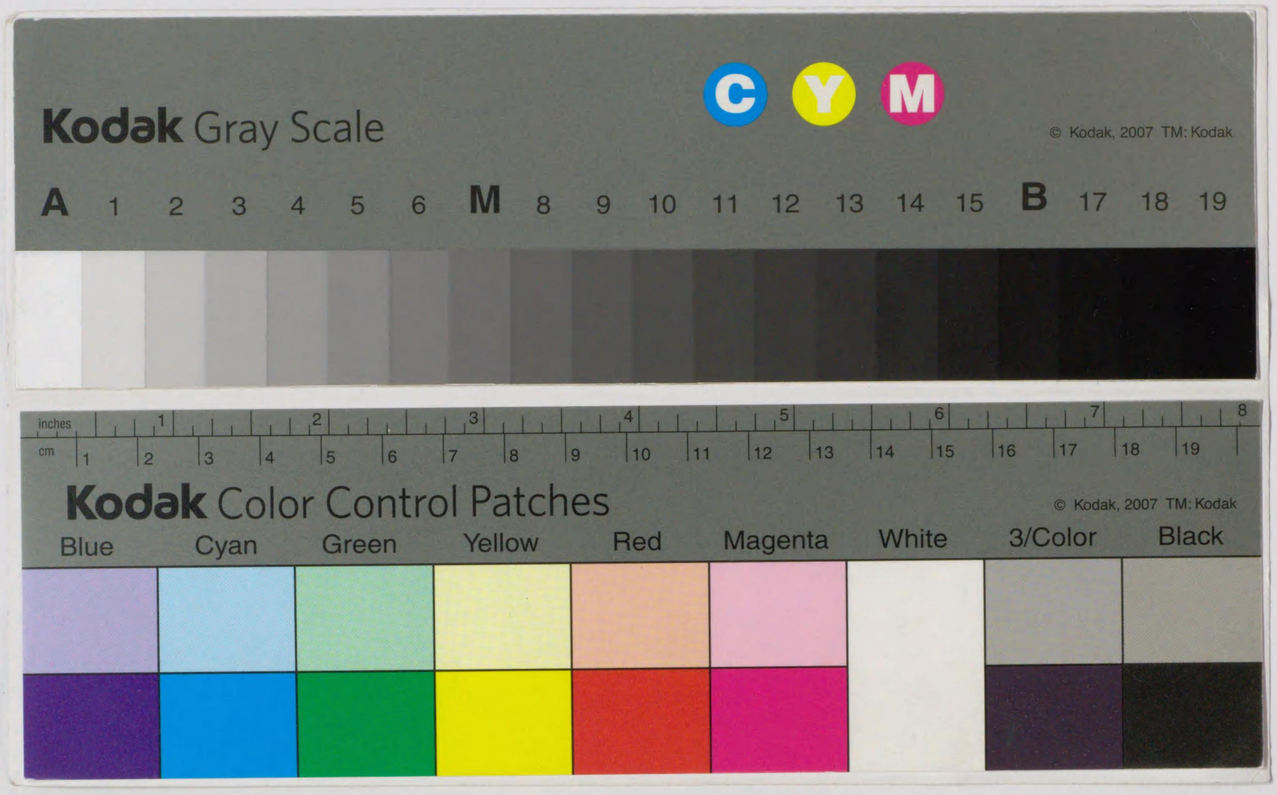


562 1141
562-1141
12005015126 91

자4Y-71

562
114

恢奇物訣

562
1141

口上

二十歳の昔から、六十四歳の今日まで、四十餘年間藝術に沒頭して來た私わ、その大半を少年文學の爲に盡しましたが、その大部分わ、博文館主大橋新太郎君の知遇の下に、編輯局の一員として、書物や雜誌に筆を執つて居りました。日本昔噺二十四編、日本お伽噺二十四編、世界お伽噺百編、世界お伽文庫五十編、小波お伽百話、同新編お伽百話等わ、卽ち其間の產物であります。

此四十年の間にわ、明治三十三年から三十五年まで、獨逸伯林東洋語學院に聘せられて、日本語の敎授を擔任の傍ら、海外の童話、傳說等を研究して、其材料を蒐集して來ました。明治四十年頃にわ、文部省囑託を命ぜられ、國定敎科書の改訂編纂に、約二年間從事して居ましたが、其後同省の文藝委員、通俗敎育調査委員に擧げられ、現今わ臨時國語調査會委員として、國語國字の整理に當つて居ります。

口上

大正五年の六月にわ、畏くも淳宮殿下（今の秩父宮）の御誕辰に際し、特に青山の皇子御殿に召されまして、東宮殿下、高松宮殿下御同席の御前で、二回のお伽口演をお聽かせ申す光榮を得ました。

又大正十年わ、私が此事業を始めましてから、恰度三十年になりましたので、多數の知友によつて、お伽三十年祭なるものを催され、貴重な記念品を贈られました。

同じく十三年十月、同志の人達と謀りまして、デンマルクのアンデルゼンの爲に、五十年祭を擧行しましたら、此事が遙にデンマルク國王に傳えられ、翌年の春其功勞に酬いるべく、ダンネブロウ二等章を贈られるなど、過分の光榮に浴したのであります。

又この二十年以來わ、時々舌粟毛の名の下に、口演旅行を試みまして、國内わ申すに及ばず、臺灣、滿洲、朝鮮、進んでわ布哇の各島までも、殆ど廻り盡したのでありますが、此間何等蹉跌もなく來られましたのも、皆大方諸君の御

愛顧の致す所と、深く感謝致す他わありません。

然るところ、此度一身上の都合によりまして、博文館編輯局を離れることになりましたが、猶餘生を斯道に委ねまして、可憐なる小國民諸君の爲に、一層奮勵致し度いというのが、相變らず私の本意なのであります。付てわ過去四十年間の作品を、此際更に整理致しまして、別に新しい創作をも加え、一種の全集體として、遍く愛誦の用に供し度いと思います。實わ兩三年前、私わ獨力を以て之が發行を企てましたが、固より廣く行き渡つてわ居らず、只一部同好の士に讀まれたに過ぎません。今回吉田百邦氏の希望に依り、普及の目的を以て更に新らしきものを加え卷數を十五册とし、一般に及し度いとの希望を以て廉價版を發行する次第であります。何卒平生の御馴染甲斐に、私の微志を御諒察下さいまして、特別の御愛顧の下に、此の事業の成功致しますよう、くれ〴〵もお願申す次第であります。

昭和八年五月

巖谷小波

562-114/1

凡例

一　お伽全集の第一巻わ、漸く發刊の運びに成つた。之に付てわ同情者諸君の、多大の援助を先以つて感謝する。

一　初め此全集の體裁を、菊版にするか四六版にするかが問題になつた。然し兒童に讀ませる書物としてわ、活字の成るべく大なるを要する。それにわ紙面も廣きを可とするので、遂に四六倍版と定めた。尤もこんな大形の本わ、我邦にわ稀に見る所であろうが、歐米でわ決して珍しいものでわない。

一　假名遣に付いてわ、私が多年使い來つて居る、所謂お伽假名なるものを用いた。これわ現行の物とわちがい、また文部省の國語調査會案とも異つて居る。然し私としてわ、廿年來之を使い來つて居た、又將來まさに斯くあるべしと、深く信じて止まぬのである。

一　その癖漢字に付いてわ、國語調査會で定めた、常用漢字以外の物まで、遠

慮なく之を用いて居るのわ、其會の一員である私として、甚だ矛盾した事であるが、その代り一々振假名がつけてあるから、必しも差支わあるまいと思う。

一　此巻わ特に怪奇物語と名づけてある廣い意味から云うと、本來お伽話なるものわ、どれも多少の怪奇氣分を含まぬのわ無い。然し此巻に收めてあるのわ、中でもその氣分の濃かなもの斗りを選んだ。但し巻頭の『大石兵六狐退治』わ、鹿兒島の名高い傳説によつたもの。又『平太郎化物日記』わ、有名な『稻生夜話』を書きかえたものである。

昭和八年五月

著　者

大石兵六狐退治……一
一　血氣の出陣……一
二　狐軍の評定……四
三　茨木童子の再來……六
四　重田の一眼坊……八
五　鞍馬天狗の落子……一〇
六　圓觀坊と赤蟹……一二
七　山姥と親父……一五
八　姉妹娘と庄屋……一八
九　クリ〳〵坊主……一九

一〇 見事狐退治……二三
不思議長屋……二七
一 不開の門……二七
二 塀の穴……三五
三 野良犬と鬼瓦……四二
四 脱身の拷問……五〇
五 試合の失敗……五七
六 地獄の探検……六四
七 魔魅玉の由來……七二
八 地蔵の杖……七九
九 石門の生柱……八六
終篇 錫杖の奇特……九三
はしがき……一〇一
平太郎化物日記……一〇一
第一日 七月一日……一〇二
第二日 七月二日……一〇六
第三日 七月三日……一〇七
第四日 七月四日……一〇九
第五日 七月五日……一一〇
第六日 七月六日……一一二
第七日 七月七日……一一四
第八日 七月八日……一一五
第九日 七月九日……一一六
第十日 七月十日……一一七
第十一日 七月十一日……一一七
第十二日 七月十二日……一一八
第十三日 七月十三日……一一九
第十四日 七月十四日……一二二
第十五日 七月十五日……一二三
第十六日 七月十六日……一二三

第十七日　七月十七日……一二五
第十八日　七月十八日……一二六
第十九日　七月十九日……一二八
第二十日　七月二十日……一三〇
第二十一日　七月二十一日……一三二
第二十二日　七月二十二日……一三四
第二十三日　七月二十三日……一三六
第二十四日　七月二十四日……一三九
第二十五日　七月二十五日……一四一
第二十六日　七月二十六日……一四二
第二十七日　七月二十七日……一四五
第二十八日　七月二十八日……一四七
第二十九日　七月二十九日……一四九
第三十日　七月三十日……一五〇
第三十一日　七月三十一日……一五三

怪船卯三丸……一六一

一　鷲に運ばれて十三年……一六一
二　寶玉の光……一六七
三　大章魚の出現……一七五
四　怪入道の魚捕り……一八二
五　海底の大變……一八九
六　大寶庫の發見……一九七
七　大砲一發……二〇五
八　怪星十三……二一二
九　新しい珍客……二一九
一〇　鬼が島の襲來……二二六
一一　海魔征服……二三四
一二　寶の眼鏡……二四一

妖怪歡迎會……二四九
一　藪蔭の火の玉……二四九

二 古家の歎待……一二五四
三 肝と涙……一二五九
四 化物屋敷が夜學校……一二六三

のろいの星……一二六九
一 天を追われたすね星……一二六九
二 滿願の日に得た奇石……一二六九
三 行者と乳母との爭論……一二六九
四 奇石わ飛んで姫の掌中……一二六九
一 奇石の奇特に姫の全快……一二七六
二 魔力を見破る行者の退却……一二八三
三 降魔の一矢に妖魔の退散……一二九〇
四 影をひそめた呪いの星……一二九〇

夜鳴鶏……一二九九
一 黄金の鶏……一二九九
二 小人の案内……一二九九
三 長者の娘……一三〇七
四 鶏の行方……一三一二
コックリ御殿……一三一九
一 鼬の行方……一三一九
二 古家の主……一三一九
三 王鼬の歡待……一三二五
四 焚火の灰……一三二五

蜜柑地獄……一三三三
一 變な子……一三三三
二 怪の塔……一三三三
三 蜜柑長者……一三三七
四 使の白鷺……一三四二
五 夜の眼鏡……一三四二
六 褒美の蜜柑……一三四九
七 蜜柑の功德……一三四九

目次

火柱城……三九三
一　麓の茶屋……三九三
二　友の死骸……三九七
三　地底の楼門……四〇二
四　門番の紛失……四〇七
五　地下の金銀……四一二
人魚の踊……四一九
上　櫛の行方……四一九
中　似た櫛……四二五
下　櫛の姉妹……四二九
附錄
厄鬼退治……四三五

大石兵六狐退治

一　血氣の出陣

大日本の南の端、薩摩の國と云う所わ、昔から大そう武ばつた國で、強い人が澤山に出て居る。近くわあの西郷隆盛も、やはりこの國の鹿兒嶋から出たのだ。それと云うのも、若い中から、さかんに武藝をはげみ、膽力を練つたからである。

こゝにむかし、大石兵六という男があつた。いつも友達の、吉野市助、大川隼人之助、春田主左衛門、曲淵杢次郎、大久保彦山坊などと云う、血氣の若武者共と一所に、近所の野山を狩りまくり、猪、狼のねぐらを荒らし

て、得意になつて居たものだ。ある時この仲間の者が、一座になつてお互いに、此頃の手柄話をしあつて居るうち、吉野の市助が進み出て、

『時に諸君、この頃吉野實方の原に、ふしぎな妖怪があらわれて、往來の者をたぶらかし、いかなる武力のある者でも、ついに坊主にしてしまうと云う事だが、今だに正體が知れんのだ。オイ彦山坊、君わ山伏の事だから、修行の力でこの妖怪の、正體を見あらわす事ができよう。どうだ、一つやつて見んか。』

と云うと、大久保わうなづいて、

『よし、一つやつて見よう。』

と、用意の珠數をおしもんで、東の方を禮拜し、袖の中で印を結んで、しばらく目を閉ぢて考えて居たが、やがて口を開いて、

『いやわかつた。これわ年經た古狐だな。一體狐と云う奴わ、昔からいろ〳〵な惡戲をする奴だ。彼の名高い那須野が原で、殺生石と云つたのも、三國傳來の古狐だつた。しかしかような惡戲をするのも、つまり武士道の衰れた兆、そこをつけ込んでの惡戲わ、正しく人間を馬鹿にした話だ。うつちやつておいてわ癖になる。はやく行つて退治しなけりやならん。』

と、云うのを聞いて曲淵と、大川わ、いづれも口を揃えて、

『よし、それでわおれ達もこれから出かけて、一氣に仕留めてくれようぢやないか。』

と、氣速にも立ちかゝると、今まで默つて聞いて居た兵六わ、此時大聲で笑い出し、

『ハヽヽヽ。何の事だ。高の知れた野狐一匹に、此方等人間が多勢で、そう騷ぎ立てる事わないワ。この兵六一人で澤山ぢや。すぐにも行つてその妖怪の、生皮見事剝いでくれるワ。それまで君達わ待つておれ。』

と云う。

それを聞くと春田主左衞門、

『なるほどこれわ兵六どんに限る。君の日頃の元氣なら、あんな野狐の十匹や二十匹、束になつて掛つて來ても、朝飯前に退治られよう。どうだ諸君この仕事わ、一つ兵六どんに委せる事にしようでないか。』

と、さかんに側からおだてあげた。これと云うのも兵六わ、常からこの仲間の中でも、一番腕自慢の男だから、こう云う時に試してみるのも、また一興と思つたからだ。

と、他の者も皆賛成して、

『それぢやアまづ先陣わ、兵六どんにゆずるとして、我々わ後陣にひかえ、もしもの事があつたら、いつでも加勢に出かけるとしよう。』

『その心配にも及ばん事ぢや。』

と、勇み立つた大石兵六、

『でわ行くぞ。』
と氣も輕く、その身も輕く出で立つて、やがて吉野の原えと向つた。

二　狐軍の評定

一體この吉野と云う所わ、鹿兒島からわ三里ばかりある、山の間の廣い野原だが、時にわ島津の殿樣の、鷹狩をする場所にもなつて居る。

所がまた此邊にわ、昔から野狐が澤山住んで居て、中にも一白、二赤、三黑、四天狐、五斑、背禿げなど云うのわ、いづれも劫を經た古狐だから、はやくもこの兵六の、退治に向つた事を嗅ぎつけ、これわ容易ならぬ大事と、いつもの松原に眷族どもをあつめて、大評定をする事になつた。

此時はるか牟禮の岡から、これこそ總大將と思われる、大きな白狐が一匹あらわれ、小狐共を案內に、此の座えと乘り込んで來た。

それを見て一同の狐ども、いづれも、

『コン〳〵、コン晩わ！』

と、頭をさげて一禮をする。

白狐わ一同を見まわしながら、

『なんと小狐共、まだ評定がきまらぬか。相手わ兎も角人間ぢやぞ。味方わいづれも畜生のかなしさ。滅多な事して不覺をとるな！』

と云うと、先刻から片隅に居た、城ケ谷の丈高狐、少し前ににじり出て、

『おそれながら申し上げます。私ひそかに考えますに、一體あの兵六と申す男わ、わずかの武藝を鼻にかけて、身の程知らぬうつけ武士でござります。たとえば今度の振舞のごときも、この吉野の狐退治に、只一人で打ち向うなどゝわ、飛んで火に入る夏の蟲、たわけの骨頂でござります。かような奴を敵手に致すに、何の兵法も入りませぬが、油斷わ大敵と申します。只一同わ心を合わせ、この要害の地を占めて、萬事の掛引にぬけ目無く、祕術魔術の數を盡し、手をかえ品をかえてたぶらかせば、たとい賴光の四天王が、まづ日本の大小むく犬、唐天竺や阿蘭陀から、犬の仲間をかりあつめて、ワン〳〵エイ〳〵攻め立てゝも、何の恐れる事がござりましょう。まして敵手わ大石どころか、小石にさえもけつまづく、ヒヨロ武者一人の事ですから、決して御心配にわ及びません。』

と、勢込んで逃べ立てる。

大將の白狐わそれを聞いて、

『丈高よくも申した。いかにも味方わ四足も達者に、變化も殊更手に入つて居る。此分ならば虎殿の、威勢を借るにも及ぶまい。』

と、さも嬉しそうにうなづいたが、

『それにつけてもこの白狐が、昔からの身の上ばなし、今改めて聞かしてやるから、これを手本に勇氣をつけろ。』

と、云うのを聞くとこの狐わ、元わ天竺の班足太子の時、塚の神となつて祟をなし、それから唐に渡つてわ、周の代の褒姒と變じ、更に日本に移つてわ、玉藻の前と身を化けて、畏多くも宮中を荒らし、遂に那須野が原え逃げて、殺生石となつてからも、尙毒氣を吐き立てゝ、立よる者を惱まして居た。所を玄翁和尙と云う、えらい坊主の法力で、もろくも二つに打ち碎かれ、こりやたまらんと逃げ出して、此の九州の南の端、薩摩の吉野に隱れ込んでからも、已に千年に餘る位、總身の白毛わ銀をあざむき、高く飛んでわ天上をかけり、低く這つてわ地の下をもぬう。神通自在の働きに、千變萬化の妙を得て、水にもおぼれず、火にも燒けず、世にも珍らしい古狐なのに、その眷族の狐共わ、百萬の味方を得るよりも、一層心強くなつて、今に兵六が乘り込んで來たら、思う存分たぶらかして、二度と此野え足踏の出來ない程、目に物見せてくれるぞと、樂しみにして待つのであつた。

三　茨木童子の再來

こんな手筈があると云うのを、知つてかそれとも知らずにか、例の大石兵六わ、衣服の裳を高くはしおり、小倉の帶をキリゝと結んで、三尺斗りの大刀を、それえズバリとたばさんだまゝ、大股に草踏みしめながら、吉野の原えとやつて來た。

そのうちに、紙作りで名の通つた、實方と云う所まで來ると、其紙を打つ砧の音の、其所此所でひびくにつれて、一つ見え二つあらわれ、はてわ十、百、千、万と、數も知れない狐火が、まるで夏の夜の螢の樣に、行くての野山にもえ出した。

兵六わキツと見て、

『畜生、そろ〳〵はじめおるな。』

と、思わずそこに立どまつたが、それにしてもあまりの數に、さて〳〵狐も澤山居るなと、いさか膽を呑まれた形だ。

けれども賴みの大刀の、鍔元をはやくつろげながら、たとえ如何なる化物でも、寄れば直ちに眞二つだぞと、勢込んで進んで行くと、にわかに夕立がザツと來て、その狐火が一時に消えたが、今度わ左の松山から、まるで鏡をならべた樣な、恐ろしい眼玉をむき、耳までさけた口をあけて、躍り出した者がある。

兵六わ一足下つて、

『おのれ化物ツ！』

と、身構えすると、先方わカラ〳〵と笑いながら、

『おれを誰だと思うのだ。むかし京都わ羅生門で、渡邊の源二綱の奴に、うつかり片腕を切られたが、間もなく乳母に化けて行つて、見事取返えして引あげた、茨木童子とわおれの事だぞ。おのれ

の様な小わつぱわ、片腕どころか指のさきで、ひねり潰してくれるぞよ。』

と、いきなり大手をさしのべて、兵六の耳をひつゝかんだ。

兵六わ刀こそ抜いたれ、この勢に度膽をぬかれ、

『ア、痛い〳〵。この指先の力でさえ、こんなに耳わちぎれそうぢや。免してくれ〳〵、御免ぢや〳〵。』

と、やつとの事で振りほどき、そのまゝ横飛にけし飛んで、後をも見ずに逃げ出したのわ、昨夜の廣言何所えやら、おそくも出鼻をひしがれたのである。

四　重田の一眼坊

夢中になつて二三町、逃げのびた兵六わ、流れる汗を拭きながら、こわ〴〵あたりを見まわすと、彼方に石地藏が立つて居る。

こりや有りがたいお地藏様、何卒武運を守らせたまえと、その前え行つて手をあわすと、やがてカアン〳〵と云う、托鉢坊主の鉦の音が聞えるから、その方をふりむくと、見上る様な大山伏、而も一つ目の異様の奴が、ノツシ〳〵と歩みよつて、

『おれわ長谷の觀音堂を建立した、炭焚五郎作の末孫、目一つ五郎次と云う者だが、今でわ此の薩摩え來て、重田の一眼坊と呼ばれ居る。近年つゞく凶作に、一向托鉢の米ももらえぬ。此上わ是非に及ばず、人間の肉でも食うてやろうと、思いながら來る所に、この地藏尊の引合わせか、さも甘そうな人の臭い、こりや有り難いお供物ぢや。どりや一ト口にきこしめそうか。』

と、大盃の様な口をあけた。

兵六わ驚くまい事か！

『ヒヤア……桑原！〳〵！』

と、雷にでもあつた様に、騒ぎまわつたその彈みに、土手からコロ〳〵ところげ落ちたが、起き上りもせず手を合わせ、

『南無地藏尊、地藏尊！　助けたまえ、すくいたまえ！』

と、一心になつて拜み立てた。

するとふしぎや大山伏わ、急に恐ろしい相好をやわらげ、

『さて〳〵貴様わ弱蟲ぢやナ。見掛によらぬ腰拔武士、骨も拔けて居る様でわ、折角食うても齒ごたえがあるまい。せめてわその腰の立つ様に、一つ祈つてやろうか。』

と、珠數をサラ〳〵押しもんで、何やら呪文を唱え出した。

所を見込んで兵六わ、急に元氣を取り直し、三尺八寸拔くよりはやく、

『この化物め！』

と、切りつけると、忽ち姿わ消えうせたが、代りにパツと立つた火花に、よく〳〵見たらば自分

の刀わ、前の石地蔵を切りつけて、大切の刃がこぼれて居た。

五　鞍馬天狗の落子

兵六わホツと息をつき、

『なるほど化物も味をやり居る。然しこのお地蔵だけわ、やはり本物の石佛だつた、それにしても失禮御免。』

と、云いながら其所を通つて、今度わ芝の元と云う方え來かゝつた。

すると山の木蔭から、

『三眼の舊猿坊だぞ。』

と、名乘りながら出て來たのわ、さも恐ろしい大入道、

『兵六來い。弟子にしてやる。』

と、いきなり襟がみ引つかんだ。

兵六わ驚きながら、振り放そうとするけれども、いつかな先方わ放さない。

その中三つのその眼玉わ、段々大きくなつて來て、尺的を山形に並べた位に見える。

兵六わふるえ上つて、

『助けてくれ〳〵！』

と、呼んでもあたりに人わ居ない。此上わ神頼みと、常わお詣もしない神々の、お名の限りを呼び立てゝ、

『助けたまえ、〳〵！』

と、聲を限りに叫んだら、どうやら入道わ消えてなくなつた。

まづ安心と襟をかき合わせて、急いで其所を立ち出ると、何時の間にか自分の側に、今度わ小さな小僧が一人、丸裸のまゝついて來る。

無氣味な奴がと思いながら、急ぎ足で歩くのに、先方わ小さな形をしながら、少しも後れずついて來る。

やり過ごそうとして立ち止まれば、小僧も同じく立ち止まる。ゆつくり歩けば先方もゆつくり、まるで影の形について居る樣だ。

兵六わこらえかねて、

『ヤイ小僧、貴樣わ何者だ。』

と聞くと、小僧わ黃色い聲で、

『鞍馬天狗の落し子で、闇間小坊主とわ私でございます。此頃ようやく巢立つた斗りだが、生れついての力持。角力なら負けないぞ。』

と、四股をふんで向つて來た。

兵六わ飛びさがつたが、敵手を小兵と侮つて、只眞ツ二つと切りおろすと、ヒラリと右え飛んで退く。つゞいて切れば又左、前や後と身をかわす、その業わ燕の様だ。

こうなると兵六わ、五條の橋の辨慶が、牛若丸になぶられて居る通りだ。

兵六わぢれこんで、此上わ手捕にしてくれると、大手をひろげて立ち向うと、こわいかに、今まで一人だと思つた小僧わ、忽ち彼所の松の蔭、此方の土手の下から、加勢の小僧を幾人となく呼び出す。しかもこの小僧わ、或わ黒く、或わ赤く、或わ、黄色、紫色と、色々な奴が數限りなく、次から次と躍り出て、兵六に飛びついたり、吸い付いたりするそのうるさゝ。兵六わとてもあしらいかねて、しばらく立ちすくんでしまつたが、ようやく思い出した眞言の呪文を、高らかに誦えあげだしたら、さすが大勢の小坊主共も、朝日の前の露の玉、一つ消え、二つ消え、とう〳〵跡もなく消え失せてしまつた。

そこではじめて我にかえつて、兵六わあたりを見まわすと、地の上にはえた小松茸が、あるいわ折られ、あるいわ踏まれて、皆さん〳〵な體になつて居る。さてわ此奴等が化けて來たのか、それとも妖怪變化の力で、これが小坊主に見えたのかと、しばらくわ只呆れる斗りだ。

六　圓觀坊と赤蟹

兵六わ小坊主のおかげで、ひどく骨を折らされたが、やつとそれもきり抜けたので、急いで七曲りまで來かゝると、金竹山の茂みから、畑でとれた西瓜の様に、轉げ出して來た奇體な化物、

『拙者わ鷲豹軒の弟圓觀坊が倅にぬツペツ坊と申す者。御見知りおかれ下さい――』

と、云いながら立ち塞がつた。

兵六ももう毎度の事に、少し度胸が据わつたので、心得たりと身構へ、刀の鍔元くつろげて、

『此奴西瓜の様な奴、甘そうな化物だナ。輪切りにして食つてやるぞ。』

と、抜く手も見せず切りつけると、チンチロリンと鈴蟲の、鳴く聲ばかり耳に聞えて、目にわその姿も見えなくなつたが、後にわ鼠の皮斗り、道のほとりに殘つて居た。

何の事だ馬鹿々々しいと、兵六わ少し張合がぬけて、しばらく其所に立つて居ると、俄かに空がかき曇つて、なまぐさい風がサツと吹き出し、ピカリ〳〵とさす電光に、つゞいて降り出した大雨わ、まるで熱湯を浴せかける様だ。

兵六わ大急ぎで、あたりの松の木の下え逃げ込んで居ると、やがて恐ろしい矢叫の聲、まるで大戰が始まつたらしい。

こりや何事ぢやと見まわすと、何時の間にか目の前え、まるで大岩のゆるぎ出した様な、恐ろしく大きな蟇が、パクリと開けたその口から、火の様な舌をベロ〳〵出して、

『我こそわ蝦墓の冠者の弟、牛わく丸と云う者なり。兵六追討の命を承わつて、只今見參つかまつる。卑怯にも木の下に、逃げ込むとわ何事ぞ。いで捉まえて一ト口に。』

と、云う。

兵六わその毒氣に打たれて、今わ逃げるにも逃げられず、只目ばかりパチクリさせ、生きた心地もなかつたが、ようやくにしてその大敵も、思いの外あつさり消えて、あやうい所を助かつたので、此上またどんな奴が現われ、どれほど惱ますか知れまいと、兵六わもうおぞけをふるい、一まづ鹿兒島え引あげて、時節をまつて出直そうと、急いで關屋まで歸つて來た。

此所にわ小さな川がある。川にわ橋がかゝつて居る。今その橋を渡ろうとすると、橋の下からヌツと出た、毛むくじやらの大きな手が、兵六の足をしつかとつかんで、一歩も前に出させない。

『こりや、何者だ？其所はなせ――』

と、云うと、

『おれわ百人一首で馴染の筈の、山邊の赤人の後裔で、山邊の赤蟹と云う者だ。その證據にわ兵六に、聞かせてやる歌がある。

この奴行くもかえるもとらまえて、引くも引かぬも足柄の關。

どうだ返歌が出來るか。』

と云う。

兵六わそれを聞くと、歌なら此方も負けぬぞと、少し首を傾けながら、

『かさゝぎの渡せる橋にすむ蟹の、あかきを見れば身ぞひえにける。』

と、半泣聲でよみあげると、赤蟹も感心し、

『なるほどなか〳〵やり居るわイ。それでわ今日わ免してやる。』

と、そのはさみをゆるめたので、又もや御意のかわらぬ中と、兵六わ足を抜くよりはやく、いそいで橋を渡り越えてしまつた。

七　山姥と親父

その中に夜もまつたく更けてしまつた。あたりわ眞の闇となつて、鼻をつまゝれてもわからぬ位に、いつか道をふみ迷つて、とある森蔭えまぎれ込むと、だしぬけに、

『オ、よく來なされたナ。』

と、まるで破藥罐をひきずる様な聲がする。びつくりしてふり向くと、これわまた二タ目と見られない、無氣味な顏をした大女、はでな衣裳にシナをつくつて、兵六の手をとりに來る。兵六わふり拂つて、

『エイ、止してくれ！　汚らわしい。一體貴様わ何者だ？』

と聞くと、

『知らんとわ情無い。私わ昔から人にうたわれる。よしあし引の山姥でわないか。』

と云う。

なるほどそうかとわ思つたが、見るとその後にわ、人の死骸や、されこうべが、數限りなくおいてある。さてわ山姥より恐ろしい、安達が原の鬼婆かと、兵六わふるえ上つて、そのまゝ飛び退こうとすれば、女わ忽ち本性をあらわし、棕梠の毛の様な髪逆立て、枯木の様な角を生やし、朱盆の様な口をあけて、只一トロと向つて來る。

兵六わ絶體絶命、そのまゝ目を閉じて口の中に、南無妙法蓮華經〳〵〳〵と、一心になつて誦えたら、どうやら呑まれも食われもせず。やつとの事で其所を逃げて、大分遠く成つてから、こわ〳〵後をふりむいたら、これも狐の仕業と思われて、彼方の山の蔭のところに、ケエン〳〵と鳴く聲が聞えて、二匹斗りの姿が見えた。

おのれ小癪な野狐め、畜生の分際として、武士の中での薩摩武士、この大石兵六を、よくも今迄なぶりおつたな。おのれ何うするか覺えて居ろと、急に氣が強くなつた兵六わ、今度わ此方から立ちむかつて、いきなりその一匹を引とらえ、膝の下に組みしくのに、思いの外手ごわくも無い。此方わいよ〳〵得意になり、

『もうこうなれば此方のものだぞ。どりや生皮をむいてくれよう。』

と、刀を右手に取り直し、己に一突とするとたん、

『ヤレ待て、兵六！　はやまるな。』

と、云う聲にどうやら覺えがある。

不思議に思つてふりむくと、こわいかにその聲の主わ、誰あろう自分の親父の、大石兵部左衛門でわないか。

『ヤ、お前わおやぢさま。』

と云えば、兵部わうなづいて、

『いかにもそちの父の兵部ぢや。宵の樣子が變ぢやから、もしやと思うてつけて來たら、案のじようこの仕末。入らざる二才の腕自慢に、無益の殺生までしようとわ、何と云うたわけ者ぢや。それに狐と云う獸わ、稻荷明神の御眷族、まして百獸の頭とも云うぞ。かような者をあやめるにおいわ、神罰、天罰立どころぢや。そう云う罪をつくらせまいと、こうしてわざ〳〵追つて來た。この親の心を察して、はやくそ奴をゆるしてやれ。それとも聞かぬと云う事なら、明日とわ云わずこの所で、直ちにそちわ勘當ぢや。二度と家えわ入れぬぞよ。』

と、嚴しい小言を云うのである。

こうなると兵六わ、親の意見を聞かないわけに行かない。憎い奴だが今夜丈わ、ゆるしてやるぞと手をゆるめると、狐わ忽ち飛び上つて、有りがとうとも何とも云わず、そのまゝ姿を消してしまつた。それと一所に兵部の姿も、何所えか見えなくなつてしまつた。さてわ一杯食わされたかと、

急に眉毛に唾をぬつたが、今更追付く事でわなかつた。

八　姉妹娘と庄屋

折角手捕にした野狐を、又ムザ〳〵とその手に乘つて、取り逃がした兵六の無念さ。今度見つけたら其場を去らせず、打つたぎつて腹をいやすぞと、齒がみをしながら睨みまわすと、又しても目の前に、野狐が二匹あらわれた。

おのれツと云いざま追いすがると、その勢に恐れてか、狐わ逃げおくれて立ちすくんだが、クルリと一つ體をまわしたら、忽ち人間の姿に化け、頭に葛の葉をのせたと思うと、それが美しい髷になり、背を薄の葉にすりつければ、見る〳〵奇麗な振袖姿の、姉妹そろつた娘になつて、さもにこやかに立つて居る。

けれども現在目の前で、狐の正體を見て居たから、兵六わものともせず、躍りかゝつて二人を引つかみ、其場に押し倒して馬乘りにまたがり、

『おのれ生も懲もなく、よくも人間を馬鹿にしおるな。今度こそわ用捨わせんぞ。』

と、已に刀をぬきはなした。

すると、二人の姉妹わ、まだ人間の聲をして、

『私達わお菊、桔梗と云う、城下の武士の娘共です。決して怪しいものでわありません。』

『何をぬかすか、たつた今まで、尻尾をさげて居つたとて、もうだまされる兵六でわないぞ。』

『さ、その狐の化けた様に、あなたのお目に見えたのが、やつぱり狐のいたづらなのです。その證據にわコレ桔梗、お前わはやく庄屋さんの所え行つて、證人に來てもらつておくれ！　私わしばらく人質になつて、このお方の手に捉まつて居るから。』

と、云うのに桔梗わうなづいて、

『それでわ姉さん行つて來ますから、どうぞそれまで辛抱して下さい。』

と、云うかと思うと、妹の桔梗わ、はやくも兵六の手をはなれて、庄屋の役所えと走り出した。

九　クリ〳〵坊主

此方わお菊、桔梗が庄屋え注進に行つた間も、兵六に抑えつけられて、苦しい息をつきながら、しきりに念佛を唱えて居るのが、又いかにも殊勝らしいので、さてわやはりほんとうの人間かと、兵六も少し氣をゆるめて居る所え、間もなくやつて來たのわ、庄屋の牧野駒右衛門、月毛の馬に跨つて、十分に身ごしらえをして居る。

しかもその後にわ、配下の若者ども七八人、それ〴〵えものや捕縄をもつて、まるで討手に向つて來た形だ。

駒右衞門わ兵六を見ると、

『夜中みだりに女をとらえて、手ごめにするとわ不屆な二才め。ソレ、からめとれ！』

と下知をする。

配下の者わ心得て、四方からおどりかゝる。兵六わ驚いて、

『コレ〳〵、それわ大間ちがいだぞ。この女こそ野狐の、現在化けて居る所を、たしかに見屆けたから捉えたのだ。』

と、云いわけしても聞かばこそ。

『そう云う貴様こそ狼武者ぢや。ソレ、その女を食われんうち、はやく捕えろ〳〵。』

と云う。

『向う見ずの猪武者とわ、ずいぶん云われた事があるが、狼武者とわ迷惑千萬。拙者こそ鹿兒島の藩中に、人も知つたる大石兵六、正に人間に相違ござらん。』

と、なおも云い開こうとする間に、もう兩手をねじあげて、早くも嚴重にしばりあげてしまつた。

駒右衞門わあざわらつて、

『ハテ、よいざまぢや。』

と尻目にかけ、更に配下の者共にわ、

『急いで夏目川原え引き出し、なぶり殺しに打ち殺せ！』

と、云う。兵六も今わ武運の盡き、生きた心地も無くなつて居ると、こわいかに忽然として、通りかゝつた一人の和尚、この體を見て不びんに思い、

『こりや庄屋どの。此の人わ何科あつて、かような繩目をうけたのぢや。』

と聞く。

庄屋わさも手柄顏に、

『此奴わ大石兵六とか申して、鹿兒島きつてのいたづら者。今夜もこの吉野の原え、化物退治だなどゝとなえて、往來の者の金を押しとり、はてわかよわい女をとらえて、無法にも手ごめに致そうとする、不埒千萬な曲者でござるから、只今かように召しとつて、成敗致す所でござる。』

と云う。

和尚わ聞いて小首を傾け、

『なるほど大石兵六とか申す、身の程知らずの青二才の名わ、愚僧も聞いた事わござるが、高の知れた腰ぬけ武士、若氣の至りでツイ出過ぎたまでぢやろう。今夜の所わ愚僧にめんじて、命だけわ助けてやつてもらい度い。』

『ぢやと申してかような奴を、オメ〳〵免してやつたらば、又此上につけあがつて、どんな惡戲を致すも知れんが……』

『イヤ、その代り愚僧の手で、よい成敗を致してやりますぢや。』

『その御成敗とおつしやるのわ？。』

『このまゝ大小を取りあげて、頭の髪をそり落とし、再び悪戯の出來ぬようにしてやります。』

これを聞くと庄屋も手を拍つて、

『なるほどこれわ名案ぢや。でわ和尚様にお委せ申します。』

と、繩を解いて和尚に渡すのに、兵六わはじめてホツと息をつき、

『南無阿彌陀佛々々々々々々。命の親の生佛さま。』

と、手を合わせて拜むのであつた。

『それでわ兵六わ愚僧が引取りました。』

と、そのまゝ連れて行つたのわ、その程近い寺であつた。

すると和尚わ、兵六を本堂え連れ込み、阿彌陀佛の前に禮拜させて、やがて小僧に剃刀を持ち出させ、兵六の頭の髷を、プツリと切つてゾリ〳〵〳〵、すつかり圓坊主にしてしまつた。

と思うと見る〳〵うちに、和尚の姿わ何所えやら。今までの寺の本堂も、忽ち消えて元の原中、これわと驚いて頭を撫でると、こゝ斗りわほんとうに剃られて、まるで西瓜でもなでる様だ。

『南無三ぼう。またやられたか。』

と、氣がついたが六日のあやめ。その葉の様に眞青になつて、只ボンヤリと立ちすくむ斗り。

髪の無くなつた頭にわ、夜風が遠慮無く吹きつけるのに、思わず

『ハツクシヨン！』

と、くさめをしたのわ、狐が何所でか笑つて居たのだつた。

一〇 見事狐退治

さん〳〵狐になぶられた揚句、とう〳〵坊主にされた兵六わ、悔しいやらばか〳〵しいやら、またきまりが悪いやらで、圓い頭をかきながら、しばらくぼんやり立つて居たが、何にしてもこのまゝでわ、おめ〳〵家え歸れない。せめて野狐の尻尾だけでもぶち切つて、此の遺趣をはらしてくれようと、こゝに又勇氣をはげまし、なおも狐の居所を、こゝかそこかと探しまわつた。

するととある並木の蔭に、二體の石地藏の立つて居る所え出た。

兵六わキツと見て、

『さてわ又化けおつたな。』

と、思いながらも、わざと化かされた眞似をして、殊勝らしく小腰をかゞめ、それに拜みをあげる風にして、側に進みよるがはやいか、いきなり飛びかゝつて二體の石地藏を、力まかせに押したおし、

『おのれよくも此兵六を、クリ〳〵坊主にしおつたな。男子の返報十層倍。今こそ思い知らせるぞ。』

と、手ばやく大刀ひきぬいて、力まかせに刺し通すと、これがほんとうの石地藏なら、刀わかえつて折れてしまうのに、見事ズブ〳〵刺せるので、さてこそ狐の正體よと、見ればこれわ劫を經た、大きな揃いの古狐であつた。

さつきまでわあれほどに、兵六をだましたぶらかして、さんざんひどい目にあわせた狐が、どうしてまた此時わ、こんなにもろくやられたかと云うに、これもやつぱり畜生のあさましさ。初めの評定が圖にあたつて、トン〳〵拍子に兵六を、思う存分苦しめたので、さてわいよ〳〵腰抜武士よと、すつかり高を括つてしまつたのが、そも〳〵大きな不覺な所え、此方わまた頭まで、圓くそられた悔しさから、はじめてしんけんの勇氣が出た。その鋭い太刀先にわ、さすがの狐も魔力を破られ、せつかく石に化けて見たが、とう〳〵豆腐も同様に、田樂ざしにされてしまつたのだ。これを思うと油斷わ大敵。また眞けんと云う事が、どれほど強いか知れないのである。

さて兵六わ、はじめて此所に目的を達し、見事に古狐を二匹まで退治たので、思わず雀躍して喜んで、その彈みに又一首、

『明日もまた狐狩してかえらめや、おなし尻尾を束ね緒にして。』

と、歌をよんで、得意になつたが、頭が寒いので氣がつけば、これはクリ〳〵坊主のまゝだ。そこでまた、

『武士の狐狩して歸るさわ、勇々しく見ゆる花坊主かな。』

『月やあらん春やむかしの我ならば、耳のあたりを元の毛にして。』

などとよみながら來かゝる所え、彼方から手に〳〵松火をもつて、大勢の者が來る樣子だ。初めの狐火を思い出して、また妖怪かと思つたが、見るとそれわ宵に別れた、あの友達の連中で、兵六の頭を見ると、

『何だ〳〵、そのざまわ。やつぱり狐にやられたナ。』

と、笑いかけたが、兵六わ頭をふつて、

『イヤ、そう笑うなよ。なるほど頭の髪わ分捕られたが　その代り敵の大將わ、この通り二匹とも討取つたぞ。』

と、肩にかけて來た古狐の死骸を、高くあげて皆に見せた。

それを見ると友達の面々、

『なるほどこれわ狐ぢや〳〵。』

『さてわ見事退治て來たか。』

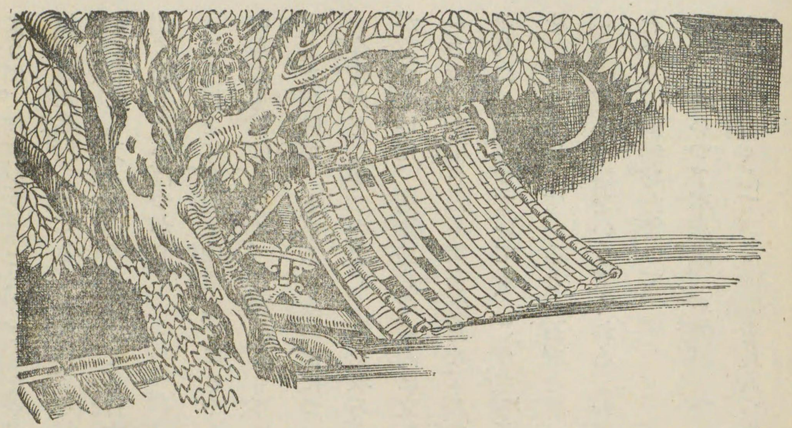
『出來したぞ、大石！』

『えらいぞ、兵六！』

と、口々に褒め立てた。

その中にやがて夜も明けたので、何れも兵六を眞先に立て、喜び勇んで引揚げたが、その晩わこの狐をさかなに、凱旋祝の酒宴をして、兵六の手柄話に、一座の花をさかせたのであつた。

また一方吉野の原でわ、大將株の古狐を、こうして二匹まで退治られてわ、あとわ烏合の小狐共、こんな所に長居わ出來ぬと、何れも尻尾をまいてちり〳〵に、何所ともなく逃げ失せてしまい、あとわ女子供でさえ、氣樂に摘草に出られるような、好い遊所になつたと云う。



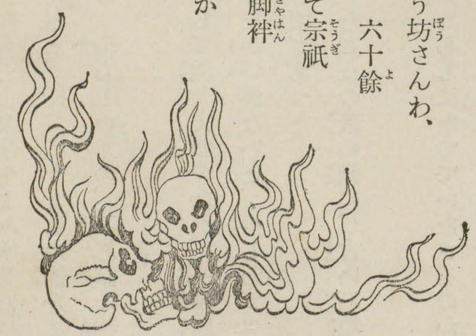
不思議長屋

一　不開の門

むかし西行法師という坊さんわ、笠一蓋に杖一本で、六十餘州をまわつたという。次いで宗祇という歌よみも、おなじく脚絆に草鞋掛で、日本中を股にかけてあるいた。

こゝに南無坊という坊さんがあつた。

やはり、西行や宗祇の



ように、何所をあてと云うでもなく、諸國をあんぎやに出けたが、もとより歌をよみもしなければ、また名所をさぐるでもない。それなら何を見てあるくのかというと、持つてうまれた物好きから、何でも方々の國々を廻つて、日本中に二つとない、變つたもの、珍らしいもの、不思議な物に出くわしたいばつかり。

さるほどに野越え山越え、にぎやかな町、淋しい村と、暇にあかして漁りまわつたが、一向面白いものも目に入らず、奇體な事も耳に聞かず、これでわいつこう出たかいがないと、少しわガツカリした氣味で、とある山陰の宿についたのわ、もう日の暮れかゝる頃であつた。

今夜わどこかこの邊で、宿を取ろうとおもいながら來かゝると、むこうの藪の側に、古い石地藏が立つていた。南無坊わその前に立ちどまり、

『ヨウ、お前さんも御苦勞だな。お堂もなしにこんな所で、年中雨ざらしになつていなさるのか。それに杖わ持つていても、こう立ちどうしぢやア、さぞくたびれることだろう。』

と、冗談をいつていると、石だと思つたその地藏が、

『イヤ感心な事をいうてくれる。お前わ頼もしい男だな。』

という。南無坊わ驚いて、

『ヤ、こいつア不思議、石佛が口をきいたな。』

と、眼を圓くして、その顏を見入つた。

すると地藏わ　また言葉をついで、

『お前の來るのを待つていたのだ。』

『ナニ、待つていた。でわ私のことを知つてるのか。』

『珍物奇物をさがしてまわる、不思議好きの南無坊だろう。』

『そのとうり。よく知つてるな。』

『お前のことわこの間から、不思議長屋の評判になつて、みな首を長くして待つてるくらいだ。といつても、その中にやア、首のない奴もあるのだが……』

こう聞くと南無坊わ耳をたて、

『ナニ、不思議長屋？　そんなところがあるのか？』

『あるのだよ。』

『どこに？』

『この宿に。』

『そりやア耳よりだ。シテその不思議わどんな不思議だ？』

『まア行つて見るがいゝ。』

『すぐにもいくが、一たいどこだ？』

『こゝから西え三四丁、町の外れえ行けば解る。』

『そりやアありがたい。』

云いながら行きかけたが、それにしてもこの石地藏の、物をいうのも不思議の一つと、もう一度ふり向いて見たら、地藏わもうツンと立つて、どこを風が吹くかといわぬ斗り。

『何にしてもありがたい。やつと尋ねる敵にめぐり會つたようだ。』

と、獨語をいゝながら、敎わつたとうり西え三四丁、足にまかせて來たと思うと、やがて古ぼけた町え來たが、まだそれらしい家わ見當らない。

と、むこうから小僧がひとり、油でも買いに行くのか、手に小さな壺をさげながら來る。南無坊わ呼びとめて、

『オイ〳〵、小僧。ちよいと聞きたいことがある。』

云つて呼びとめると、小僧わ立ちどまつて此方を見たが、まだ默つて顏ばかり見ている。

『不思議長屋というのわ、どこだ?』

聞いたがまだ返事もしないが、たゞ指で横の方をさした。

『何所だ? …… 彼方か?』

さゝれた方を指すと、ウンともいわずに合點々々する。

さてわこいつ啞なのか。それにしても此方のいう事わ解るようだ。して見ると無言の行か。何にしても行つて見ろと、指された方えまがると、やがて其所に大きな門があつたが、その屋根つゞきが、ずつと左右に長屋になつている。

さてわこれだなと、南無坊わひとりうなづきながら、門の側えよつてみると、戸がちやんと閉つている。

側を見ても、門番もいないから、自分で戸を押してみるのに、内からかんぬきがかけてあるとみえて、とても開きそうにない。

仕方がないから叩いてみた。すると叩く度に、奥の遠くの方で、何やら聲がする。初めわ只聲だけであつたが、そのうち聲わ言葉になつて。

『誰だ〳〵?』

というようだ。

『私わ珍物、奇物好きの、不思議好きの南無坊だ。不思議長屋わこゝかな?』

と、聞くと、

『オヽ、南無坊か、待つていた。すぐに入つてきなさい』と云う。

『入りたいが、門が明かんワ。』

『明かん門を入つて來るのが、不思議長屋の不思議なところだ。遠慮なく入んなさい!』

と、いわれるのでまた押して見たが、まだビリツともしないのである。しかし南無坊わ考えた。入つてこいというからわ、何うかして入れる筈だがと、しきりに首を傾けていると、後からまた足

音が聞えた。

ふりかえると、その音わ、先刻の壺を持つた小僧が、もう歸つて來たのであつたが、小僧わ南無坊を見ると、

『そんなところで、何してるんだ！』

『どうしたら、この門があくのだ？』

『ナニ、この門わ明かずの門だよ。』

『その明かずの門を、どうして入るんだ？』

聞くと、小僧わ笑いながら、

『何だ、これが入れないのか。』

いう中にもう小僧わ、そのまゝ姿を見せなくなつたが、再び聲のした時わ、もう門の中から聞えて、

『坊さん、まだ入れないのか。』

と、嘲けるようにいうのである。

南無坊も悔しかつたが、さてどうする事もできない。杖で扉を叩きながら、

『小僧、おいてきぼりわひどいなア。』

『だつて一しよに來ないんだもの。』

『行こうたつて、行かれないぢやないか。』

恨むようにいつていると、後からまた聲がかゝつた。

『南無坊、まだグズ〳〵してるのか。』

『エツ。』

と云つて、ふりむいたら、そこに先刻の石地藏が來ている。それにもまた度膽をぬかれて

『ヤヽ、お前さんも、こゝえ來たのか。』

『そうだ。おなじ長屋の不思議仲間さ。』

『そんなら一しよに來なさい。』

と、いう中に、もう見えなくなつたが、

『オイ、なぜ來ないのだ。』

と云つた時わ、もう門の內え入つていて、その聲わするが、姿わみえない。

南無坊わ二度も馬鹿にされて、忌々しくてならないが、さて手のつけようもなく、たゞ門の上下や、左右の隅などを、どこかに開くところがないのかと、見てまわるばかりである。

するとまた後から、三度目に聲をかける者がある。

『モシ〳〵、御出家？　何をしていなさるのだ？』

南無坊わふりむくと、それわ宮本武藏と岩見重太郎を、兄弟分に持つているような、わかい武者

修行の男であつたが、これもまた不思議仲間かと、南無坊わまだ返事もせず、つく〳〵その全身を見ている。

武者修行わまた不審そうに、

『一たい御貴殿わどこから來たのだ?』

『それを聞いて何にしなさる。どうせ人間であるからわ、どこからか來て、何所えでも行く。ちようどお前さんもその通りだろう。』

『なるほどこれわ一本まいつた。しかし此所えなにしにこられた?』

『そう聞くならば解つている。この不思議長屋を見に來たのだ。』

『身共もこの化物屋敷を、わざ〳〵見とゞけに來たのぢやが……』

『それわちようどよい同伴ができたな。でわ入ろう……というたところが、あいにくこゝが入れんのでなア。』

『ナニ入れんことがあるか。』

武者修行わ鐵扇をもつた手で、つよく扉を叩いたが、何の手ごたえもないばかりか、三度目に叩いた時わ、その手が妙にしびれたと見えて、さすがの修行者も鐵扇を落した。

するとどこからか、チヨロ〳〵と走つてきた一匹の猫が、その鐵扇をくわえると、すぐ門の下をくぐつて、中えと走りこんでしまつた。

二　塀の穴

南無坊わ思わず笑いだして、

『ハ、、、、猫に鐵扇をとられるようでわ、貴殿のお手並も知れたものぢやな。』

とひやかすと、修行者わ眞赤になつて、

『なにを無禮なツ!』

と刀の柄に手をかけたが、眼わ門のほうを睨んで、いかにも無念そうに光つている。

『猫も不思議長屋のやつか。鰹節のかわりに鐵扇を食うか。よつぽど齒が好いと見えるな。』

南無坊わこういつて、また笑つている。

修行者わ、まだむきになつて、

『どうも怪しからん。笑いごとぢやござらんぞ。』

『怒つたところで仕方がないから、この上わ泣いてみるかナ。』

南無坊わ、あくまで茶化すので、修行者わ腹をたて、

『さてわおのれも化物の仲間だな。』

と、向きなおつて刀を拔きかけた。

ところを南無坊わ、持つていた如意でそつとおさえて、

『そこ〳〵、その元氣がござるなら、化物退治もできようが、私わ化物でないから、お相手わ迷惑ぢや。……イヤ實を申せば此方からこそ、貴殿もまた先刻からの、小僧や石佛の仲間と思つたくらいぢや。しかし、こうして同じ門のそとに、立往生をしあつてみると、いわゆる一樹の蔭というものぢや、どうぢや、これから力をあわせて、この長屋の探檢をしようでないか。』

『それわ身共も望むところだ。』

『ところが、かんじんの門があかんでわ、どうすることもできんから、この上わ化物と根競べ、こゝで一晩明かして見よう。そのうちにわこの中から、なにか出てくるかも知れん。ところをこゝで引捕えて、中の案内をさせてやろう。』

『なるほど、それも名案だが、なにしろこゝで大の男が、ボンヤリ立つてもいられまい。なんとか仕草わあるまいか。』

『さようさ。少しまちたまえ。』

南無坊わ腕をくんで考えたが、

『よろしい。それでわこゝで二人が腕競べをしてみようかな。』

『面白い。やつて見よう。だが貴殿わ坊さんぢやないか。それでも武藝のたしなみがあるかな。』

『坊主に武藝のないこともない。むかしの武藏坊、常陸坊、乃至一來法師なぞわ、いづれも聞えた軍人ぢやつた。』

『それでも貴殿わ武器をもつまい。』

『武器わなくても仕合わできる。』

『それでわ角力か腕押しか。』

『イヤ、其方わかまわず武器で來なさい。こちらわ素手で澤山ぢや。』

こゝまでくると修行者わ、又馬鹿にされたとおもうから、

『よろしい。それでわ眞劍で行くぞ。』

と身構えると、

『そちらが眞劍なら、此方わジヤンケンで行こう。』

と、また茶にする。

『なにを小癪なツ！』

云ううちに修行者わ、キラリと引きぬいた一刀を、威すつもりでふりかぶつて、實わその峰打ちに、眞向からと振りおろすと、

『オツと、それなら鋏で澤山ぢや。』

と、右の手の二本の指で、その刀の峰をはさみ止めた。

『ヤツ、生意氣な。』

と、つゞいて二の太刀を斬りこむと、

『ソレ、今度わ石ぢや。』

云いながら拳をかためて、カンとその平を打ちはらうと、その勢いで修行者わ、もろくも刀を手からおとした。

修行者わやつきとなり、大手をひろげて組みにかゝると、南無坊わヒラリ體をかわしたが、そのまゝ修行者の後えまわると、

『そウれ、今度わ紙になつたぞ。』

云うよりはやく手の平で、修行者の目をかくしてしまつた。修行者わ殘念ながら、

『まいつた〳〵。』

『イヤ、御遠慮にわおよばん。もう一度來なさらんか。』

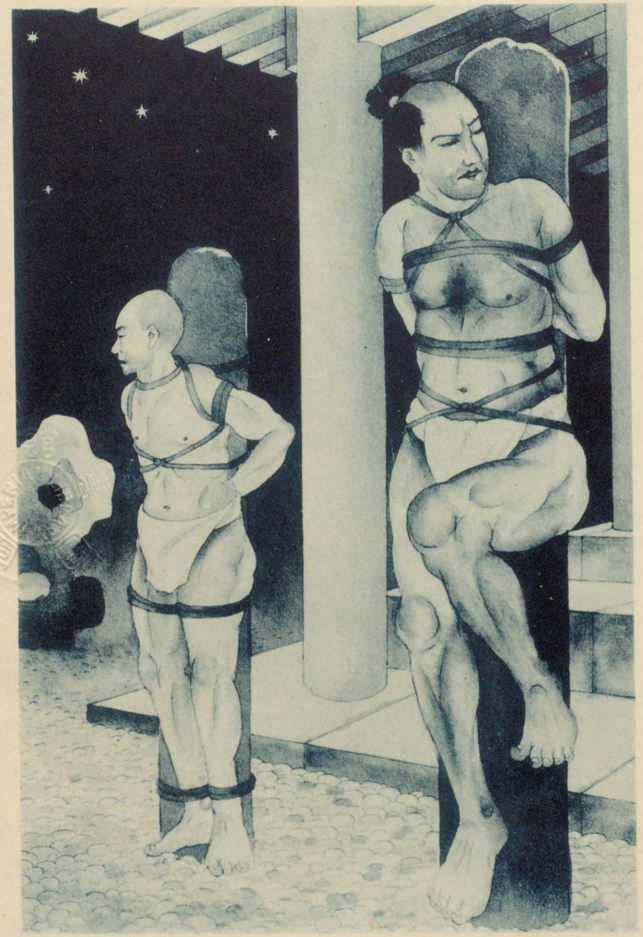
『イヤ、どういたして、とても身共のおよぶところでわござらん。それにしても御貴殿わ、一たいどこの何人でございます。』

と、手をついて聞きだした。

南無坊わ手をふつて、

『コレ〳〵、そう眞面目にでられても、名乘をあげるほどでもないが、私わたゞ南無坊といつて、奇物珍物の掘り出しを樂みに、こうして諸國をまわつているばかりさ。』

と、輕くいつたが、修行者わおも〳〵しく、



『どういたしまして、只今のお手の中　われ〳〵如き青二才の、遠く及ばぬところでございます。何卒これからわ、私をお弟子の中におくわえ下さいまして、よろしくお稽古を願います。』

『そう云われると挨拶にこまるが、ナニ弟子なぞとおもわずに、たゞの同伴になるといたそう。そうなると名を知らんでわ困る。一體なんと云われるのぢやな?』

『只今まで名乗りもいたしませんわ、まことに御無禮をいたしました。實わ今日まで井の中の蛙、何人ともまた仕合をせぬ間に、一かど上達いたしたつもりで、自分でわ宮本武藏と岩見重太郎を一しよにして、宮見武太郎と申しておりましたが、今日からわあらためて、弱見久太郎といたします。』

『ハヽヽ、弱見久太郎わよかつたな。』

『つきましてわ今一度、お稽古わ願えますまいか。』

『何度でもきなさい。』

『しからば御免!』

久太郎わまた刀をとりあげようとした。するとまたさつきの猫がきて、その落ちている刀を咬わえようとしている。

『おのれツ!』

と、いつたがもうおつつかない。猫わすばやくその手の下をくゞつて、門の下を潜ろうとした。それと見ると南無坊わ、

『ヤツ！』

と、大喝叱りつけた。

その聲がまた素敵に大きかつた。

するとその聲に驚ろいたか、猫わたちまち姿を消したが、後にわ刀が殘つていたので、久太郎わ急いで拾いあげると、いま猫の齒のあたつたらしいところから、刀わホロリと二つに折れてしまつた。

『ヤヽ、これわ！』

久太郎わたゞ呆れている。

南無坊わ覗きこんで、

『ドレ〳〵。見せなさい。』

と、その折れた刀を手にとり、落ちた刃も拾いあげて、つく〴〵見つめていたと思うと、やがて強くうなづいて、

『よし解つた。こりやこの門わもう明くぞ。』

という。

『どうして解ります。』

『まづ私に委かせなさい。』

いゝながら南無坊わ、その折れた刀をもつたまゝ、そツと門の側をはなれ、およそ五六間はなれたところから、門の扉の方をねらつて、

『エイ、ハツ！』

と、掛聲をしながら、その折れた刃をなげつけると、刃わ宙をきつて扉に當つたが、なんの手應えもないのに、サツと左右に開いてしまつた。

ところをすかさず南無坊わ、久太郎の手を引立てるようにして、

『それこの間に！』

と、走りこんだら、首尾好く門をはいることができたが、見るとも後の方の、扉わもとのようにしまつていた。

二人わ顏を見合せたが、無言でうなづきあつたまゝ、更にあたりを見まわすと、そこに先刻の猫がおとなしくきて、右の前足をあげてゐる。ちようど玩具のまねき猫の通りに。

『さ、案內しろ！』

南無坊わ猫にいうと、猫わ素直にうなづいて、そのまゝさきに立つていく。

久太郎わ感心して、

『先生、うまく行きましたな。』

『ハヽヽ、まづ猫だけわこつちのものにしたよ。』

『やつぱり先生も私の眼にわ、この長屋のお仲間としか見えませんな。』

『そう見えるくらいだから、またこの門がはいれたのぢや。』

『まつたく先生がいらつしやらなければ、とても私一人でわはいれませんでした。』

『だが、これからがかんじんだ。油斷をしなさるなよ。』

と、更に猫に向い、

『コレ、先刻の鐵扇わどうした?』

聞くと、猫わまだそれに答えず、やがて塀のあるところまでくると、無言でその節穴を指した。

『よし。こゝから見ろというのだな。』

南無坊わ、それえ眼をよせたと思うと、そのまゝまるで吸いこまれるように、その塀の中え入つてしまつた。

それにつゞいて案內の猫も、その穴からはいつてしまつたが、久太郎も後れまいと、先刻南無坊のしたように、その穴から覗こうとすると、中からその頭をコツンと打つ者がある。

久太郎わ思わず後しざりして見ると、その打つた物わ、さつきの鐵扇であつたが、塀の穴わもうふさがつて、中を覗くことさえできない。

三　野良犬と鬼瓦

こにまた、不思議長屋の門前え、時々來る野良犬があつた。この犬わ、むかし桃太郎のお供をして、鬼が島征伐にいつたものゝ、何百代かの後胤で、その先祖が鬼が島凱旋の後、仲間の雉子の媒介で、これも同じ家來同士、猿の娘を息子の嫁にもらつたが、その二匹の間にできたものゝ末だけに、今だに頭と尻尾だけわ犬で、胴と四足わ猿だから、他の犬などにわ眞似もできない、木登り、竹渡りを自在にやる。

今日も一日野山を駈けまわつて、かなりにくたびれた脚を、彼所にころげ、此所に臥そべり、その間に落ちた魚の骨を食つたり、溜つた雨垂の水を飲んだりして、今しも長屋近くやつてくると、なんだか人の氣勢がする。

野良犬わ耳を立てたり、鼻を反らしたりすると、これわ年取つた行脚の坊さんと、若い武者修業の侍とが、塀のうちと外とで、何か話しながらまご付いて居るのだ。

けれども、言葉わ解らぬので、なお側えと忍びよつてみると、横合から口笛を吹く者がある。それわ時々餌をなげてくれる、長屋の小僧の一人であつた。

野良犬わ口笛の方を見かえると、小僧わ長屋の窓から顏をだして、

『オイぶち! ちよいと來い!』

と云う。

『また何かくれるのかネ。』と、鼻を鳴らしながらその窓からはいると、

『オ、いゝものをやる、あれ彼所に好い餌があるんだ。早く行つて喰つてやれ！』

と、指した方を見ると、あの若侍の弱見久太郎である。

『あれならお前さんが云わないでも、先刻から知つてるんだ。だが……彼奴わなか〳〵おれの歯にやアあわない。』

『どうして、あの塀にはいれない位だから、お前だつて譯わあるまいが。』

『ところが、そうわいかないよ、あれでも侍わ侍だ。斬ると血のでる物を持つてる。』

『その心配わ入らないよ。その切れ物ももう取り上げてあるんだ。』

『そうか……そんならやつてみようか。』

野良犬わ意地が汚い。こう聞くと好い氣になつて、侍の側え嗅ぎよつた。

この時まで塀の内をうかゞつていた侍も、さすがに修行の効わある。一方に氣を取られているようでも、自分の後に近よるものにわ、それと早くも氣がついた。

で、くるりと向き直つた。途段に野良犬わ飛びついた。けれども侍わ驚かない。ヒラリと體をかわしざまに、鐵拳で野良犬の横面をはたいた。

『痛い。キヤン！』

と、云いながらも、もう一度飛びかゝつた時にわ、はやくも頭を引つかまれて、グイと抑えつけられてしまつた。

野良犬わ苦しまぎれ、例の猿の方の前足で、侍の手を引かきにかゝると

『オヤ、此奴、生意氣なことするな。』

と、いきなりその足をねじあげてしまつた。

『ア、痛たゝた、キヤン〳〵、キイ〳〵！』

と、犬猿一しよの泣聲をたてた。

『小癪な眞似をすると聞かんぞ。』

侍わグツと膝で抑えつけ、なおも鐵拳で打ち据えようとした。

すると塀のなかから、和尚わ聲をかけて、

『待たつしやい〳〵！』

『オ、止めるのわ先刻の和尚か。』

『いかにも南無坊ぢや。』

『してまた何故止めなさる？』

『その犬わ只の犬でない。うまく使えば役に立つ。』

こう聞かされて侍わ、今更のように野良犬をあらためると、顔と尻尾わ犬に相違ないが、他わ皆猿である。

『なるほど、此奴わ面白い奴だナ。』

『そう思つてくださるなら、何卒命をお助けください。』

『助けてやつたら役に立つか。』

『お役にたちます、おやくに立ちます。どんな御用でもおつしやつてください。』

『見れば貴様わ、胴體わ猿だな。猿なら少しわ智恵があるだろう。その智恵袋を一つしぼつて、此塀の中えはいる工夫をしてくれ！』

こう云うと野良犬わ、

『その智恵があるくらいなら、私も塀のうちに入つております。』

『それぢやア貴様にもはいれんのか。』

『入れんこともありますまい。智恵でわ開けることわできせんが、何所からか登つて行つたら…』

『なるほど、貴様のその脚なら、登つて越されないことわあるまい。よし……免してやるから登つていつて、内からこの門を開けろ！』

いゝながら野良犬を放してやつた。

野良犬わ、はじめて自由になつて、一トふるい身を振わすと、まづ以前の門の屋根を見あげたが、

『よし……こゝから登つて飛びこんで見る。』

そこから身を躍らせて、まづ長屋の蔀に飛びつき、それ

云うよりはやく、溝の側の石にのると、そこから垂木につたわつて、ヒラリと屋根の上え登つた。

久太郎わ扇子をひらいて、下からヤンヤとはやしている。野良犬わ得意になつて、屋根の棟まではいあがると、今までその邊に寝ていたらしい猫が、慌てゝむこうえ飛びおりたが、それと同時に屋根の上に、ヌツとあらわれた者があつた。それわ大きな鬼瓦に、急に手足のできた者であつた。

『野良犬、待て！』

と、どなりながら、いきなり摑みかゝつてきた。けれども野良犬わ驚かない。そこわ先祖の血を受けている。鬼を見ると急に元氣づいて、犬猿二匹分の勇をふるつて、その鬼瓦にたちむかい、たちまち大格闘となつた。

久太郎わ下から眺めて、氣わもめるが、さて仕方がない。

するとまた塀の中から、

『この勝負わ何方だろうな。』

と、云うのがまた南無坊の聲だ。

『犬もなか〳〵やりますな。』

というと、

『これで負けると折角の久太郎が、また入れぬ事になるぞ。』

そう聞けば侍わ、どうしても犬に勝たせたい。けれども手が屆かないから、加勢をしてやるこ

ともできない。

氣が氣でないから、門の下に只ヂダンダを踏むばかりだ。するとまた後から、

『どうです何方が勝ちますかネ。』

と、いうのわ、例の小僧である。而もその小僧の手にわ、先刻逃げた猫をだいている。

それが何だか久太郎にわ、馬鹿にしているようなので、久太郎わカツとなつて、いきなりなぐりつけようとすると、ヒラリとその上を飛びこえながら、

『オツとあぶない。萬歳樂！』

などゝまだ冷評している。

その中に屋根の上から、ガラ〳〵と凄まじい音がして、落かゝつてくる物があるので、久太郎わ思わず身をひくと、ちようど自分と小僧との間に、ドスンとばかりに落ちてきたのわ、先刻からの鬼瓦だつたが、落ちたはずみに眞二つになつている。

と、同時に彼方の塀が又二つにサツと割れて、

『さアお入んなさい！』

というのわ、先刻の野良犬であつた。

久太郎わ喜び勇んで、すかさず塀の内えと走りこんだ。

すると、その中にも、また大きな塀があつて、その塀の側にたつているのが、先刻の南無坊であ

つた。

『オ、和尚！』

なつかしげに進みよると、和尚わ急に顔をしかめて、

『シツ！』

と、手を左右に振る。

此方も無言で目を見はりながら、更にその手の指すほうを見ると、その大きな塀にわ、小さな窓が切つてあつて、それから内を覗けというのらしい。

久太郎わ合點して、その切窓まで歩みよつて、そツと内を覗いて見ると、なにを見たか久太郎わ、アツといつて後え三歩、飛び退さつたはずみに、ちようど其所にうづくまつていた、野良犬の足を踏みつけると、

『オ、痛い、キヤアン〳〵！』

と、チンバをひいて逃げていつた。それを見ると小僧の手から、例の猫が飛びおりて、直ぐと割れた鬼瓦を抱きあげた。

その時見たら鬼瓦わ、再び元の形に戻つていた。

『弱見殿、どうでしたな。』

南無坊が尋ねると、久太郎わまだ聲をふるわせて、今更のように南無坊を見ながら、

『なるほど……不思議長屋ですなア。』

と、まだ顔色わ蒼ざめている。

そも〳〵この塀の内にわ、どんな物があつたのだろう？

四　脫身の拷問

一

たいこの不思議長屋にわ、お定まりの不思議が七つある。

ところでその七つの不思議が、既に二つまで實現された。その一つわ『明かずの門の手無し出入』二つわ『不意塀のとうせんぼう。』——南無坊も久太郎も、この二つまで見せつけられて、それにわ、大して驚かなかつたが、三番目の不思議にわ、さすがの南無坊もギヨツとした。後から見せられた久太郎の、顔色を變えたのも無理わない。

卽ちその第三の不思議わ、『脫け身の拷問』というのである。

と、いうのわ他でもない。自分の體がいつか脫けだして、自分と全く同じ人間が、眼の前でさま〴〵の苛責にあうのである。

今しも久太郎わ、南無坊に教えられた切り穴から、塀のうちを覗いてみると、そこにわ閻魔の廳から出張してきたかとおもう、恐ろしい形相の鬼共が、二人の罪人を白洲に引きだして、さかんに拷問にかけているのだ。見ると、その一人わ圓裸で逆大の字に吊られ、その股のところに丸太を

渡し、赤鬼と青鬼とが兩端に乘つて、しきりにシイソウをこいでいる。

その丸太の動く度に、股わ裂けそうになるのだから、罪人わ苦しがつて、ヒイ〳〵いつて泣いているが、その罪人わ誰あろう、南無坊そのまゝの坊主である。

また一方、地の中に、肩のところまで埋められて、兩手の自由も利かなくなつている所え、側から蜂の巢をさしむけ、その顔えと蜂をけしかける。蜂わ爭つて顔にとまる。とまればその度にチク〳〵刺す。刺されて痛いから拂おうとしても、手まで埋まつているから、何うにもならない。

なんという酷い拷問だろう。一たい何所の何者かと、その顔を見ると驚いた。見ている久太郎自分なのである。

これを見ると、頭から熱湯を浴せられ、背え冷水をかけられたように、カアツとなつたり、ゾウツとなつたり、我知らず身體をふるわせながら、

『一たいありやアなんでしよう？』

と、南無坊に聞いてみたが、坊もたゞ首を振るばかりで、

『かなり膽をつぶさせますな。』

久太郎わ顔を撫でてみながら、

『あんな物見せられると、なんだか身體中が變になつてきますよ。』

『左樣……別に痛くも痒くもないが、なんだか變に痺れるような……』

『自分の體でないような……』

『まるで借り物でもしてるような。』

『こつちのがほんとの自分か？』

『あつちのがまことの私か……』

二人わ變に身を悶えながら、

『いよ〳〵、不思議になつてきますなア。』

と、顔見合せて苦笑するばかりだ。するとまた塀の中から、

『ワツハツハハ……――ワツハツハハ……』

こつちの二人わ、云いあわせたように、四つの眼を一しよによせて、例の切り穴から覗いてみた。

すると、もう中の二人の、一人わ例のシイソウの丸太で、身體を眞半分に裂かれてしまい、一人わ蜂に刺したてられて、人間の首だか南瓜だか、わからないくらいに腫れあがつて、全く息も絶えてしまつた。こつちわまたゾツとして、急いで顔を見あわせながら、

『やつぱり南無坊！』

『久太郎！』

と、辛くも無事を喜んでいる。こうなるとこの場にいるのが、いかにも心細くなつてきたので、二人わ少し後え退つた。

ところえ以前の犬と猫とが、また姿を現わした。こうなるとこんな奴でも、せめて力に頼みたくもなつて、手をあげてさし招くと、二匹わすぐ飛んできたが、二人の前で身を躍らせたと思うと、一匹わ赤、一匹わ青、二匹の鬼に化けてしまつた。

鬼といえば今の今まで、塀の中で自分たちを責め殺した奴だから、キヤツといつて逃げようとしたが、どうしたものか身體中が、まるで棒のようになつて動かない。

その中また以前の小僧がきて、

『ソレ、奥え案内しろ！』

と、おごそかに下知をする。その聲がまた恐ろしいので、顔を見るとこわ如何に、今までの小僧わまた變つて、閻魔王その儘になつている。

二人わもう絶體絶命！　いよ〳〵この上わ先刻の通り、ほんとに自分たちが責め殺されるのかと、南無坊わ覺悟をきめて、しきりに念佛を誦えだすと、久太郎もまた度胸をすえて、しきりに氣合を入れている。

犬の青鬼、猫の赤鬼わ、用捨なく二人の手をとつて、

『さア來たまえ！』

と促がす。二人わもう觀念して、じつと目を閉じるばかりだ。

と、忽ちバツとなつて、前が明るくなつたように感じた。それと同時にこつちの氣分が、なんと

なく浮くようにも思えるので、我知らず眼をあけると、これわまた思いもよらず、先刻あれほど恐ろしく見えた、地獄の白洲のようなところわ、いつか立派な座敷になつていて、閻魔大王とおもわれたわ、人品の悪くない長者のような主人。また青鬼赤鬼わ、青と赤との衣裳をつけた、氣の利いた二人の家來になつている。

此方わまたうろ〳〵しながら、そこに小さく控えていると、主人わさも愛想よく、

『いや、これわ〳〵、ようこそお出で下された。サアサ、こちらえ〳〵！』

と、緞子の座蒲團の列んでいるところをさす。

南無坊わ尚四邊を見まわしながらも、年の功でさすが場馴れている。

『これわ恐れいります。して御主人わ、失禮ながら……？』

と、いゝかけると、その後をはやくも引取つて、

『いかにも私が、この不思議長屋の主人、天小路不二丸というものです。』

と、どこまでも大様である。

久太郎わ若いだけに、こういう時の挨拶にわ、容易に言葉も出なかつたが、じつと主人の顔を見ながら、

『それでわ貴君が御主人で、この不思議をなさるのですか。』

『まア〳〵そんなことわ今申さずとも、自然に解る時節がきますぢや。まゝそれよりお茶でも召し

あがつて！』

と、いう中、青と赤の家來が、二人の前え茶をもつてきた。それわ薄茶なのであつた。

南無坊わ坊さんだけに、茶の湯の心得があるから驚かないが、久太郎わ武骨一遍、こういうことにわまた面喰う。

それに何だか氣味が悪いので、まるで飲む氣わなかつたが、南無坊が無造作に、

『それでわ頂だいいたしましよう。』

と、まづ菓子を取つて食べ、つゞいて茶碗を手にとつた。久太郎わ氣をもんで、

『よせ〳〵！』

と、小聲でいつたが、南無坊わ平氣で飲んでしまつた。

こうなると久太郎も飲まずにいられない。——實わない〳〵腹も減り、喉も渇いているところだつたから、エイまゝよとばかり、菓子わ二つばかり一度に頬張り、茶碗わ片手に持つたまゝ、グツと一トロに飲み干そうとしたが、直ぐにブツと噴きだして、

『ヤツ、こりや苦いぞ。毒だ〳〵！』

と、茶碗まで投り出すのを、南無坊わいそいで制して、

『コレ、弱見殿、どうしたものぢや！』

と、たしなめる。青い家來わ笑いながらも、自分の手拭で零れた茶の仕末をする。

赤い家來わ氣をきかして、別の茶碗に素湯をいれてきて、

『でわこれの方がお宜しうございましょう。』

久太郎わまだ苦い顏をしながら、手ばやくこの湯をとつて飮んだが、

『なにしろ口直しをしなければ……』

と、また菓子をとつて食う。今わ糞度胸を極めた形だ。

主人の不二丸わその體を見て、

『イヤなか〳〵面白いお方ぢや。』

と、かえつて氣にいつたという風だ。

何にしても先刻からとわ、まるで別世界え來ているようだ。それがまた不思議の一つとも思われる。南無坊わ少し膝をすゝませて、

『御主人にうけたまわりたいが、何時頃からこのお邸にいらつしやるのです。』

と、念のために尋ねた。こんな事から手繰りよつて、不思議の源を究めるつもりだ。主人わ輕くうなづいて、

『さよう……何時からと申してよいか……まづ、お日樣が西に沈んで、雨が天から降る時分からだそうです。』

と、答える。

けれども南無坊にわ大方よめた。

『なるほど……すると月が北から昇つて、龜が空を飛んでいた時分わ、どこにおられましたかナ？』

と、その上手を行くつもりだ。

この問答を側で聞かされて、久太郎わたゞ眼を見張るばかり。双方の顏を見くらべて、內證で鯉口をつくろげている。

五　試合の失敗

主人役の不二丸わ、それにわ答えず、この時左右をかえり見て、

『客人えの御馳走に、何かして御覽にいれんか。』

というと、まづ靑の家來が、

『ハツ、畏まりました。』

と、いゝながら、庭の方をむいて、なにやら呪文をとなえながら、三度ほど撫でるような手つきをすると、見る〳〵中に眼の前に、築山ができ泉水ができ、そしてその邊にわ、櫻の花の眞盛りという、畫のような景色になつてしまつた。

『ヤアでかした〳〵。』

と、主人がほめれば、

『これわお見事〳〵！』

と、南無坊も賛美している。

次いでまた赤の家來が、手をポン〳〵と三度たゝくと、彼方の山陰から、赤襷の少年が一隊になつて練りだし、また此方の池の岸にわ、白襷の少年隊が現われ、たがいに廣い芝生えくると、手に〳〵花の枝をもつて、これから花試合をはじめるようすだ。

『イヤ、これわ面白いな。』

と、久太郎も思わず膝をのりだした。

その中に、どこかの陰で、合圖の太鼓がなると、この二隊の少年わ、双方からいどみかゝつて、さも勇ましく戰いはじめる。

『ウム、なか〳〵やりますな。』

と、久太郎わ夢中になつて見ている。

その中に勝負がついて、白方の勝となると、その大將らしいのが、縁ぢかく進んできて、ていねいに禮をする。主人公わ南無坊を見かえつて、

『なんと、御坊！　褒美をやつてくださらんか。』

と、いうので、久太郎わひきとつて、

『イヤ、褒美わ拙者が進ぜたいな。』

と　腰のあたりを探る間に　南無坊わ右の手をかざして。エイといゝながら、一トふり振るといつかその手の中に、見事な金地の扇が持たれている。

『でわこれを御褒美に！』

と、赤い家來にわたすと、それを持つて赤い家來わ、すぐ大將の少年にわたした。

これを見た久太郎わ、また大きな目を見張つて、

『ヤア　御坊もなか〳〵やられますな。』

と、その行力に感心している。

『ナニ、これしきわ造作もないことぢや。』

と、南無坊わすましたものだ。

すると不二丸わニツコリ笑つて、

『いや、流石に不思議修行の御坊だけあつて、味なことをやらつしやる。今のわどこから取られましたナ。』

と、聞く。

『後の町の店にあつたのを、ちよつと取りよせたばかりのことです。』

『でわ序に、その隣の、傘屋の傘もとられますかナ。』

『お安い御用ぢや、取つてみましよう。』

と、また前のような掛聲をして、手を宙にあげると見る間に、傘わちやんと持たれていた。

『でわその隣の桶屋の桶わ。』

『それも御用とおつしやるなら……』

いう間に、またその手にわ桶が來ていた。

その度にまた、青赤の家來も、手を拍つてわほめている。なんだかこの南無坊まで、今わこの長屋の仲間のようでもあるので、久太郎も少し氣味惡くなつたが、もつともこの位の法力わ、昔の名僧にもあつた筈だから、修行次第でできないでもなかろう。こうなるとこの久太郎も、何か修行の腕を見せなければ、巾が利かないようにも思われた。そこでまづ不二丸にむかい、

『南無坊殿の法力わ、これで十分お解りでござろう。ついでに拙者もおさかなに、なにか御覽にいれたいが、もとより武骨者のことぢやから、武藝の外に藝わござらん。ならばあの少年を、一寸相手に拜借いたしたいものです。』

『これわなるほど面白かろう。でわ一つ拜見いたしましようか。』

『でわちよつと支度をします。』

と、久太郎わ手ばやく身ごしらえをして、やがて庭え下りたつた。

この時南無坊わ、久太郎になんだか目配をしながら、

『生兵法！　生兵法！』

と、それを止めるつもりだつたが、血氣の久太郎の耳にわ、それが『南無妙〳〵』と、お經でも誦えるように聞き流されてしまつた。

その中に久太郎わ、前の芝原の上で、少年の大將とむかいあいに立つた。双方の手にわ、また花の枝が持たれている。

青い家來が行司のように、その中央に立つて、氣合を見ている。

そのうちにエイツというと、もう仕合わはじまつた。久太郎わ兎に角武者修行者、相手わ可愛い少年、何のことわない山猿が、小兎と咬みあつているようなものだ。ところがその小兎わ、月のお宮で餅をつくように、巧みに跳ねまわり躍りまわる。山猿わまた、燒栗に打たれたように、目がくらんで只ヨロ〳〵するばかり、さん〴〵惱まされた揚句、手の花の枝まで打ちおとされて、

『まいツた。』

と、平太ばつてしまつた。不二丸わ笑いながら、

『イヤ、面白いことでござりました。』

と、冷かすようにいう。

『それだから言わんことか。』

と、南無坊も苦笑をしている。

久太郎わ、たゞ息を切らせながら、

『なるほど不思議長屋だ。こんな小僧にこんな腕があ
と、いゝながら、極まり悪そうに、後の方えさがつた。
ところえ南無坊もまたやつてきて、小聲に、
『弱見殿、怪我わなかつたかナ?』
『イヤ、えものがえものだつたから、何所も傷めわしませんが、何にしても馬鹿にできん小僧で…
……』
『そりやアどうせこゝの奴だから、鼠一匹でも只の奴ぢやないさ。それにうつかり手を出すのわ損
だ。まア君わ引込んで、しばらく私に委せときなさい。』
『然し、いかにも殘念です……』
『サゝ、その悔しがリが却つてよくない。仇わいづれ討てる時があろう。』
と、しきりになだめている。ところえまた、家來たちが出てきて、
『只今の勝負について、勝を得ましたあの少年に、今一度御褒美をお遣りください。』
『承知しました。……それでわ今度わなににいたしましようような』
と、首を傾けさせもあえず、
『その褒美にわ、望みがございます。』
と、少年が口を出した。

『望があるならいわつしやい!』
『只今の御武家の、首がいたゞきとうございます。』
『ナニ首を!?』
と、南無坊もこれにわ弱つた。弱つたどころか驚いたのわ、當の弱見久太郎である。
たがいに顏を見あわせて、なんの言葉も出しかねていると、主人の不二丸が一ト聲高く、
『オゝ、よくいつた。いかにもその首を褒美に取らそう。』
と、いうかと思うと久太郎の首わ、白木の三寶の上にのつて、その少年の前にでた。南無坊わギヨツ
として、今まで居た久太郎の方を見ると、もうそこに姿も見えない。さてわ魔物の手にかゝつて、とう
〳〵首まで取られたか。生兵法わ大傷どころか、命まで棒にふつてしまつた。不憫な人ぢや、氣の毒な
ものぢや。南無阿彌陀佛々々々々々〳〵と、心から念佛を誦えながら、じつと眼を閉じてしまつたが、再
びその眼をあけた時わ、もう少年の影も留めず、庭の景色の花盛りもなく、築山も泉水も、どこえ行つ
たかすつかり消えて、自分わ只廣いあばら屋の、破れ疊の座敷の中央に、獨り坐ているばかりである。
『南無三!　やられたな。』と、思わず口走ると、
『南無坊!　やられたか。』と、どこかで聲がする。
南無坊わあたりを見まわしながら、
『天小路不二丸わどこえ行つた?』

と、聞くと、

『その不二丸わ此所にいる。』

と、答わするが、姿わ見えない。

『シテ、弱見久太郎わ？』

『その久太郎わ彼所だ。』

と、聲わ同じたが、まだ解らない。こういう時にわ肉眼より、心眼で見るが一番と、南無坊わまた眼を閉じて、じつと魂を丹田に落ちつけ、しばらく無念の境にいつた。

するとその効驗があつて、さながら朝霧の晴れるように、無明の境から有象が見えた。

そしてその見えたところによると、今しも弱見久太郎わ、首と胴とがはなれながら、それ〴〵に生を得て、首わ屋根の上に、先刻こわれた鬼瓦に代つて、物見の役をつとめ、胴わまた例の猿犬と一しよに、小屋の中に入れられて、獸のように四つんばいになつている。

六　地獄の探檢

元より弱見久太郎といつても、南無坊にとつてわあかの他人、たゞこの不思議長屋の門前で、偶然めぐりあつたばかりだ。

けれども、そこが坊主だけに、こうした久太郎の最期を見てわ、知らぬ顔ですごされない。本來武士仲間なら、すぐに仇討と出るところだが、かんじんの相手の不二丸が、どこえいつたか影も見せないでわ、空をあてに打つ事もできない。

せめてわ自分の本職にもどつて、神妙に回向でもしてやろうかと思つたが、ふとまた思いなおすと、なにしろ不思議長屋でのことだから、こんな有様になつたのさえ、一たい眞なのだか僞なのだか、それがまた疑われもする。

そこで、南無坊わ思いついて、かねて修行しておいた、墮獄の法というのをこゝろみた。これわ自分が生きたまゝで、地獄え墮ちていく法なのである。

で、南無坊わまた體を正し、下腹にグツと氣をいれて、目をつぶつたまゝ印を結ぶと、其身わたちまちこの世をはなれて、地獄の一丁目と俗にいう、六道の辻にきてしまつた。

見ると辻番の小鬼は、日南で爪をみがいてゐる。

南無坊わ聲をかけて、

『コレ〳〵、ちよつと尋ねるが、もしやこゝをツイ今がた、若い武者修行の武士が通りわしなかつたか。』

と尋ねると、小鬼わちよつと考えたが、

『イヤ、通りませんよ。』

と、首を振る。

『ハテナ。そんな筈わないが。』

と、云うと、

『そんなら、この先の婆さんに聞いてごらんなさい。』

と、三途の川の方を指す。

『そうだ。あすこできいてみよう。』

南無坊わ、急いで三途の川の渡場え來て、そこにいる婆さんに聞いてみた。

『モシ〳〵、若しやこの渡船を、今がた若い武者修行の亡者が、一人でわたりわしなかつたかネ。』

婆さんわ、皺くちやな顔から黒い歯をむきだして、

『なんだネ、武者修行の亡者?』

『そうだ。まだ年の若い……といゝたいが、事によつたら首と胴とが、別々になつてきたかも知れんから、年頃をいつても解るまいが……。』

婆さんわ小首をかたむけて、

『妙なことをいゝなさるネ。首と胴とがはなれたつて、それわ婆婆での話です。こゝえ來ちやア一切平等、みんな一ようの三角紙をはられて、亡者のおいきせになつてしまうんだ。そんなことといつたつてわかりやしないよ。』

こういわれると道理だが、それにしても何とか解りそうなものだと、また婆さんに尋ねるのであ

る。

『それでも身分と年頃わ解るだろう。町人とか武士とか、老人とか、若い者とか……。』

『それも皆おんなじ風俗になつて、ちよいと見てわわからないが、歩くさまで見わけるのだネ。』

『それが解れば知れそうなものだ。兎に角若い武士が一人。』

と、くどくもまたきくと、婆さんわうるさそうに、

『それを聞いて一體どうしなさるんだネ。』

『イヤ、實わこういうわけさ。私のちよつと知邊の者で、たしかに死んだのか死なんのか、それがよく解らんから、此所まで尋ねにきましたのさ。』

『見ればお前さんわ、坊さんのようだが、それがほんとに死んだのなら、早速お前さんのお世話になるはずぢやないか。』

『ところがそれが只の死様でわない……ある者に殺されたようなのだが、はたして命を落したか、それともまだ命があるか、すなわち眞に地獄え落ちたか、それともまだ婆婆の者だか、それが確めたいばかりなのさ。』

こういうと婆さんわ、小首を傾げて聞いていたが、

『待ちなさい。人に殺されたというのなら、血の池か針の山だが、それにしてもこゝわ通らなけりやならないネ。私もつい年のせいで、一々亡者もおぼえきれないから、まア兎に角此所をわたつて、

閻魔さまのお役所えいつて、よくしらべてもらうがいゝネ。』

こういえばその通りだ。南無坊もうなづいて、

『少しもはやく知りたいと思つたから、それでお前さんに尋ねるんだが、そういうことなら仕方がない、閻魔さまのお役所までいくかネ。』

『そうしなさい。ちようど渡船も出るところだ。』

と、婆さんわ川の方をさす。南無坊わまた指されるまゝに、やがて三途川の渡船に乗りこんだ。

と、船頭の黒鬼わ、ふしぎそうに南無坊をみて、

『コレ、お出家さん！　お前さんわたゞの亡者でもないようだが、こゝをわたつて何所え行きなさるんだネ？』

『ちよいと閻魔さまのお役所まで、用があつて行くのだよ、事によると血の池や、針の山えもまわりたいと思つてる。どうだネ、道わなんぎかネ！』

『どうせ地獄のことだから、どこえいつたつて楽な道わないが、そんな所までなにしに行きなさる。』

『急にたづねる亡者があるんだ。』

『そりや又なんの亡者だネ。』

『若い武者修行の武士だが、ちつと変つた死様をしたから、その行方がわからないんだ。』

『お出家にも似合わない、妙なことをいゝなさるネ。どんな死様をしたか知らないが、死ねば極楽と地獄にきまつてる。それとも全く死にきれないで、まだ宙に迷つてるかネ。』

『事によつたらそうかも知れない。こりやア私が氣がつかなかつた。』

と、南無坊も心元無げに、じつと宙を見あげるのであつた。

その中に渡船がついた。客わ皆ゾロ〳〵あがる。客の大方わ亡者だから、只オヅ〳〵と怯えるばかりだが、南無坊わさすがに落ちついて、悠々と檢札場えかゝり、そこの小鬼に切符をわたして通ると、更に居合わせた獄吏の青鬼に、

『私わ閻魔さまのお役所え、尋ねたいことがあつていくのだが、ちよつと取次いでくれまいか。』

といふと、青鬼わ南無坊を、頭から足まで見おろして、

『何の用で來なすつた。』

すこぶる無愛想にいう。

『用事わ行けばわかるのだ。たゞ取次いでくれゝばいゝ。』

と、賣言葉に買言葉、此方からも無愛想にいつた。青鬼わ牙をむいて、

『そんな用なら取次がん。』

と、そのまゝ他をむいてしまう。

怒らせてわ面倒と、南無坊わまた聲を和げて、

『イヤ、いつてもどうせ解るまいと思つたのだが、そんならお前さんに尋ねよう。』

と、今まで六道や荘塚で聞いたことを、もう一度繰りかえしてきいてみた。
するとふしぎにもこの青鬼わ、案外よく要領を得ていた。
『アヽあれかネ、あのことなら解つてる。』
と、いかにも無造作だ。
『そんなら知つてるのか？』
『よくわかつてる。』
『ぢやア來ているのか、居らんのか。』
『來ようにも來られまいぢやないか。まだ死にもせんものが。』
『エツ、それぢや眞に殺されやしないのだネ。』
『ウン、たゞ首と胴とがはなれたばかりさ。』
『オヤ……』南無坊わ目を圓くして、『それぢやアお前わあのことを、すつかり知つてなさるのかネ？』
と、驚きながらも問わずに居られない。青鬼わうなづいて、
『お前さんも修行が足りないネ。あの不二丸の術に巻かれるようでわ。』
と、いかにも知りぬいているようである。
こうなつてわ仕方がない。南無坊わ下手にでても、こゝでこの青鬼をつかまえて、樣子をたづねるが一番だと思つた。
『それほどお前さんが知つているなら、どうか譯を話してくれまいか。一たいあの不二丸というのわ、どういう質の人なのだか、あの不思議長屋というのわ、一體何ういう所なのだか、また久太郎の首と胴とわ、どんな工合に放されたのだか……殘念ながら私にわわからん、一つ委しく教えてもらいたい。』
と、これわ全く本音であつた。青鬼わなに思つたか、左右をそつと見かえつたが、
『その話わこゝでわできない。……まアこちらえ來るがいゝ。』
と、仔細ありげに先にたつ。そのまゝ南無坊もついて行くと、青鬼わ三途の川の土手の陰の、石室のようなところえと入つたか、そこにわ岩のデエブルをはさんで、石の腰掛が三つ四つ据えてある。その中の一つに自分がかけると、南無坊にもかけろという。
『でわ御免！』
と、座につくと、青鬼わまじめな調子で、なおもあたりをはゞかりながら、
『生きながら地獄え來られるくらいな、お前さんだから話すのだが、あの不二丸という奴わ、實わ私の弟でネ。』
と、思いがけないことをいゝだした。

七　魔魅玉の由來

不思議長屋の不二丸が、地獄の青鬼の弟と、はじめてきいた南無坊わ、さらに一そうの意外を感じて、眼を圓くせずにわいられなかつた。

青鬼わさこそといわぬばかりに、

『一たいあの不二丸という奴わ、私の弟でわありながら、生れついての大茶目鬼で、この地獄にいる時分にも、閻魔さまの御命をろくにきかず、いろんな惡戯をしてこまらせたものだ。たとえばこゝえくる亡者をつかまえて、針の山えいく奴を、血の池地獄え送つたり、修羅道え落ちていこうとするのを、餓鬼道の方えおいやつたりして、亡者のマゴつくのを見て喜んだり……そのために係りの鬼まで、どんなに手數をかけさせられたかしれない。私わ兄のことだから、ずいぶん小言をいつてやつたが、なか〳〵耳に入れもせず、しまいにわ茶目がちようじて、ある時あの淨玻璃の鏡に、どこからとつてきたものか、松脂をベツタリ塗つて、なにも寫らないようにしたので、とうという大王さまのお目玉をいたゞき、地獄を追いだされてしまつたのだ。』

『ハテネ。地獄を追いだされたら、どこえ行くのぢや？』

『サ、行きどころがないものだから、そこで娑婆えでもいつたのだが、その行きがけの駄賃に、いつの間にか、大王さまの手箱から、魔魅玉というものを盜んでいつたのだ。』

『魔魅玉とわなんだネ？』

『それわどんなことでも自在にできるという、不思議の力のある玉だ。』

『それで、あの不思議長屋なんてものを、自分でこしらえあげたのぢやナ。』

『そのとうりだ。』

『一たいどんな玉なのだろう？』

『ちようどお前さんの持つている、珠數の親玉ぐらいのものだが、いかにもよく透きとうるので、ちよいと見たばかりでわ、あるのか無いのか解らないくらいだ。』

『フーン。』

『そこで大王さまもお腹立で、すぐ取りかえせとおつしやるんだが、なにしろあの玉が先方にあつてわ、私等のような平の鬼でわ、どうにも手のだしようがない。それをまた好いことにして、勝手な眞似ばかりしていたとわ、かねて噂で知つているのだが、お前さんまでその手にかゝつたと聞いてわ、いよ〳〵すてゝわおかれんな。』

『私わ別に迷惑もせんが、今もいう同伴の者が、その手にかゝつて首と胴を、二つにはなされたので驚いたのぢや。』

『しかし、それわ驚くにもあたらん。みんなその玉の魔力のしわざで、首と胴とはなして見せても、決してほんとに殺してわおらん。それわ私が請合つておく。』

『どうしてそれがまた解るナ?。』

『一たいあの不二丸という奴わ、地獄にいながら地獄を呪つていたのだ。というのわ、他でもない。こうして毎日亡者のくるのを、どうかして邪魔しようと思つてたくらいだから、けつして人の命をとつて、地獄えよこすようなことわしない。』

『なるほど。』

『それだから久太郎とかいう者の命も、たしかに自分があづかつておいて、いろんな悪戯ばかりしているのだ。』

『そんなことして、なんの役にたつ?』

『さ、そこがあいつの茶目なところだ。考えて見ると罪もない奴さ。』

と、はてわ兄だけにひいきもするようだ。

けれども南無坊わ、たゞ聞きながしている譯にわいかない。兎に角不二丸の不思議の力の、原がどうやら知れた以上わ、さらにどうにかしてその不思議を、自分の力で破つてみたくもなつた。それにわまづ、魔魅玉とかいうものを、どうかして取りあげるが一ばんだと思つた。そこでまた青鬼にむかつて、

『してみると、その魔魅の玉わ、閻魔大王にも大切な物なのか?。』

念を押すと、青鬼わちよつと考えて、

『さよう。別に大切というほどでもないが、なにしろあれわ大王さまの、欠伸の度にでた涙が、百遍目にかたまつてできた玉なのだから、あれがなくなつてみると、大王さまにも心細いのだろう。それに第一あのとうり、ふしぎの力がこもつてるので、それを勝手にふりまわされると、大王さまのお仕事の邪魔にもなるから、それで取りかえせとおつしやるのだ。』

これを聞くと南無坊わ、また異様な感じがした。

『なんだツて? その玉わ閻魔大王の、欠伸の涙のかたまりだつて?』

『そうだ。』

『面白いものぢやナ。それにどうして不思議の力があある?』

『ハヽ、これわなるほど聞くのももつともだ。なにしろ大王さまという方わ、しじう苦い顔をなすつて、ついに泣くことも笑うこともないが、それでも退屈の時わ欠伸をなさるのだ。ところがその欠伸をなさるのわ、地獄の閑な時なのだ。地獄の閑な時というのわ、亡者のこない時なのだ。そこを見込んで不二丸めが、あの玉を盗み出したのだが、それに不思議の力のあるのわ、つまり大王さまでも欠伸をなさる時わ、油斷をなさる時なのだから、その油斷の隙のあるところえ、ふだん大王さまの威力におそれて、おとなしくしていた魔物どもが、めい〳〵魔力を吹込んだ。そこであの玉の中にわ、大王さまの思いもよらない、いろ〳〵な不思議な力が入つてしまつたのだ。』

『それでやつと解つたが、するとその魔魅の玉わ、大王さまのお力でも、取りかえすことができな

いというんだネ。』

『それが今もいうとうり、油斷の隙をねらわれて、思いがけない魔力をいれられたんだから、それでさすがの大王さまも、自分でどうとも手がつけられないのだ。』

『して見ると今のところでわ、あの不二丸という奴わ、地獄の閻魔大王より、えらい力をもつているのぢやナ。』

『いつてみればまアそんなものさ。』

と、青鬼も今わ匙をなげた形だ。

南無坊もまた腕をくんで、じつと考えこんでいたが、こうなるとまた例の氣性で、やるところまでやらずにわいられなくなる。

『しかし青鬼さん、誰にだつて苦手というものがある。あの不二丸にだつて、なにか苦手がありわしないか。お前さんわ兄弟だけに、それを知らないことわあるまい。』

こういわれると青鬼もまた考えたが、やがて横手をうつて、

『ウンある〳〵。その苦手わたしかある。彼奴わ幼い時分から、鬼のくせに爪が弱くて、蚤をつかまえることができなかつた。それで蚤が一ばんきらいだつたよ。』

『蚤とわ妙なものが苦手だな。よしそれなら私に法がある。こりやいゝことを教えてくれた。ありがたい〳〵。』

と、南無坊わもう目算がたつたように、急に元氣づいて、

『時に、折角こゝまできたのだから、閻魔さまにも會つていきたいが、一つ取次いでくれまいか。』

とたのむと、青鬼わちよつと小首を傾けたが、

『待ちなさい。この頃わお閑のようだから、お會いにならないこともあるまい。一つ伺つて見てあげよう。』

こういうと青鬼わ、すぐと石室を出ていつたが、しばらくするとまた歸つてきて、

『今お前さんのことを申上げたら、大そうお喜びで、すぐに會おうとおつしやる。さアこつちえ來なさい！』

と、案内する。

それについて南無坊わ、そのまゝ閻魔大王の前えでた。

見ると正面の一段高いところに、かねて畫で見たとうりの大王が、眞赤な顔をして構えている。

その口がカツとあいたので、また欠伸でもするのかと思うと、雷のような聲で、

『南無坊よくきた。』と挨拶をする。

『これわ〳〵大王さまにわ、はじめてお目にかゝります。私わ南無坊と申して、不思議好きの氣まぐれ坊主、今度わ生きながらまいりましたが、いづれ御厄介になる時節もございますから、どうぞよろしくお見知りおきを？』

と、ていねいに挨拶すると、大王わ皆まできかず、

『早速ながらお前のことわ、今の鬼からきいて、よくきてくれたと思つている。ついてわ幸い頼みたいことがある、どうか聞いてくれまいか。』

『どんなお頼みか存じませんが、私の方にもお頼みがございますから、それとお取替を願います。』

『よし、その頼みわなんぢや？』

『しばらくの間そこにある、浄玻璃の鏡をお貸しください。』

『この鏡をなにに使う？』

『その使い道を申しましたら、大方大王さまのお頼みを、お果たし申しますことになりましょう。』

『でわ、あの魔魅玉を取つてくれるか？』

『いかにも、あの玉を取りかえしますために、少し鏡を拝借いたしたいので。』

『それなら貸してあげよう。』

すると、側に控えた見る眼の大臣が、あわてゝそれを遮つて、

『もうし大王さま、他の物なら知らぬこと、この鏡わこの御前に、片時もなくてかなわぬもの、それをお貸し遊ばしましてわ！』

と、いゝかけても、『エイ、汝わ黙つていろ！』と、大王わ耳にもかけない。

八　地藏の杖

一

たい浄玻璃の鏡というものわ、地獄えおちてきた亡者を、その前に立たせると、娑婆でしてきた悪いことが、皆それえ寫つて出る仕掛になつている。

けれどもまた南無坊わ、永年の修行によつて、生きながら地獄え來られたくらいだから、またいとおもつた。

自分の法力で、生きている者の所業でも、それえ寫し出すくらいのことわ、出來ないことわあるま

そこで、大王の許可を得ると、まづこの鏡の前に立ち、なにか口の中に呪文を唱えて、それからカツと息をかけると、鏡わたちまち曇つたが、その曇りがはげる時、中にあらわれた圖を見ると、そこに久太郎が立つている。

たゞし、その首も胴も、ちやんとつながつているのであるが、首わ墨で眞黒に、胴わ朱で眞赤に塗られて、石の柱に縛りつけられたまゝ、眼ばかりパチクリさせているところを見ると、たしかに死んでわいないとわかつた。

『よし、それで解つた。でわもう一つ。』と、いゝながらその圖を吹きけし、今度わ、じつと眼を閉じて、念入りになにか唱えたが、再びカツといつて息を吐きかけ、それの消えるのを見つめると、次に現われた新しい圖わ、この間の不思議長屋の門であつたが、やがてそこえ旅僧があらわれ、つ

づいて武者修行があらわれ、猫があらわれ、鬼瓦があらわれ、まるで初めからのことを、映畫にでも仕組んだように、次から次と寫しだして、ちようどあの不二丸の前で、久太郎が仕合に負けて、その首と胴をはなされるところまでくると、第一巻のおわりといつた風に、そのまゝあとわ途切れてしまつた。

これでわいかんと南無坊わ、また一心に呪文を唱え、印を結んでまた息を吹きかけたが、再び寫つて出るところを見ると、やはり前と同じ圖でわないか。

『エイ、殘念な、まだ私の行が足らんか。』

と、またしても法をやりなおす。その中にわ、その坊主頭と、拜んでいる手の指の尖とから、湯氣がだん〳〵たちあがるようになり、その湯氣で鏡が曇るようになつたが、そこえまた火のような息を吐きかけて、今度こそわと、その消えるのを待つと、そのあとにあらわれた圖わ、まつたく前とわ變つていた。

卽ちそれわ、不思議長屋の裏座敷の、緣側の下のところに、あの猿犬が寢そべつているが、それが蚤にせめられて、時々體をふるわせたり、自分で横腹を咬んだりしているところだ。

それを見ると南無坊わさも嬉しそうに、

『ウン、これだ。』

と、我知らず聲をあげた。

その間に、鏡の面わ變つて、今度わあの不二丸が、例の小僧に腰をもませながら、晝寢をしているところが寫つた。

『よし面白い……してあの魔魅玉わどこにあるナ?』

と、鏡にむかつて尋ねると、圖わまた變つて、その玉が金襴の袋に入れられて、寢る時も肌をはなさず、腹帶の中に入つているのが解つた。

こゝまで見屆けた南無坊わ、はじめて鏡の前をはなれて、

『イヤ、まことに有がとうございました。これで私の願もかないましたから、大玉樣のお賴みも、やがてかなえてさしあげることができましょう。』

と、さも得意そうにいつて、しきりに汗をふくのである。

さつきからの樣子を、閻魔大王わ目をはなさず、じつと見ていたのであるが、この時しきりにうなづいて、

『さすが南無坊! よいところに氣がついた。してこの上わお前の力で、あの玉が取りかえされような。』

『たしかに取りかえしてお目にかけます。』

『イヤ、賴もしい〳〵。』

『でわ私わ、一刻もはやく、娑婆え歸るといたしましよう。』

『オヽ、それがよかろう。しかし、折角來たのだから、序に地獄を見物していきなさらんか。』

というと、例の青鬼がそれえでて、

『でわ、私がご案内いたしましよう。』

と云つたが、南無坊わ小首をかたむけ。

『イヤ、それよりも私わ、賽の河原のお地藏さまに、一寸お目にかゝつて參りとう存じます。』

『なるほど、これわ南無坊らしいことをいう。でわそれえ案内してやれ！』

『ハツ。』

それで青鬼わ先にたつ、南無坊わ大王に暇をつげて、その後についていくと、間もなく賽の河原えきた。するとあの地藏尊わ、はやくもそれを見てとつて、

『オヽ南無坊か、よく來たな。今度わお役目ご苦勞だぞ。』

と、もうちやんと知つている。南無坊わまだ合掌して、

『つきましてわお地藏さまに、ちとお智慧を拜借に出ました。』

『再びあの不思議長屋の、不二丸に近よる道が知りたいか。』

『そのとうりでございます。』

『それでわ、しばらくこれを貸してやろう。この杖をついて行くなら、どんな所えも自由自在ぢや。』

と、地藏尊わ、自分のついていた錫杖を、南無坊に貸してくれた。

南無坊わ押しいたゞいて、

『これわまた思いがけない、結構な物を拜借いたしまして、千人萬人の力を得たようでございます。』

『但し南無坊！　如才もあるまいがその杖わ、いかなる時でも横にしてわならんぞ。杖わ縱につくものぢや。横にすると役にたゝんぞ。』

『それわ心得ましてございます。』

『でわ早く行きなさい。久太郎が待ちかねておろう。』

と、云われるので南無坊わ、そのまゝ又地藏尊にもわかれ、案内の青鬼にもよく禮をいつて、

『でわ私わこゝで失禮する。』

と、云いながら、錫杖をトンとつくと、そのはずみに體わ宙に飛んだが、再びトンと止まつた時わ、例の不思議長屋の門前に、ちやんと歸りついていた。

南無坊わまづ大聲に、

『不二丸どのわおいでか。また南無坊がまいつたぢや。この門を開けなさい！』

と、鷹揚に名乘りかけた。

それでも內わヒツソリとして、なにも答える聲がしない。

『あけぬとあれば開けんでもよろしい。取次無しで入つてまいるぞ。』

と、再び杖をつこうとすると、急にその杖が重くなつて、自分の力でわ上らないから、ふしぎに

思つてよく見ると、何時の間に來たか例の小僧が、錫杖の下に抱きついている。

『こりや小僧、また出たな。邪魔すると容赦わせんぞ。』

威しつけると、小僧わ手をふつて、

『イヤ、邪魔にまいつたのでわございません。ちよつと申上げることがあつてまいりました。』

『なにか用か。』

『久太郎さんのお傳言です。』

こう聞くと南無坊も、聞かずにいられない。

『オヽ、久太郎わ何うしている？』

『裏門の方にいらつしやいますから、どうぞあちらえおまわりを。』

『裏門とわどこだ。』

『私がご案内いたします。』

と、今まで抱えていた杖を、まだ放さずその手にもつて、ちようど按摩の手引でもするように、先に立つて案内しようとする。

が、それをさせると杖が横になる、横にしてわ役にたゝんと、かねて地藏尊から聞いていたから、はやくも氣がついて、

『コレそこを放せ！』

と、云つても小僧わしうねく、

『でもご案内いたしますのに……』

と、放さないだけ、その心もよめた。

さてわ此奴わ親切ごかしに、おれの力を削ごうというのだなと、はやくも氣がつくと、南無坊わ怒つて、

『エイ、そんな案内わいらんぞ。』

と、力まかせに小僧をはねのけ、その勢でトンと突いて、

『ソレ、裏門え！』

と、いうと直ぐもうその目指すところえ來た。

裏門というのわ石の柱だ。そしてその石の柱にわ、人形のような物が彫りつけてある。

と、思つたのわ大ちがいだ。それわ墨と朱とでぬられた、弱見久太郎であつた。

『オヽ、こりや淨玻璃で見るとうり。』

と、走りよつて、その繩を解こうとすると、久太郎わ首をふつて、

『解くな〳〵！』というようだが、それわ口が動くばかりで、言葉わまつたく聞えない。

『一たいこりやアどうしたのぢや？』

と、聞いても、またそれに答えず、たゞ願で奥の方をさす。さゝれる方え目をやると、門の戸わ

しまつていて、その下にわ例の猿犬が、こつちをじつと睨んでいる。

九　石門の生柱

さすがの南無坊、はやくも悟つた。で、わざと物やわらかに、その猿犬をさしまねくと、先でもそろ〳〵寄つてくる。

ところえ、またさつきの小僧がきた。今度わ體をひそませて、そつと南無坊の後から、又しても杖をとろうとする。取られたら最後、すぐ横にされてしまう。横にされたらすぐ効目がなくなるのだから、南無坊わ油斷わできない。

『こいつ、また來おつたな。』

と、足をあげて蹴とばすと、彼方えポンと倒れたが、すぐさま起きあがつて、ヒヽと妙に笑つて消えてしまつた。

その間にまた杖の頭が、急に重くなつたかとおもうと、いつの間にか猿犬が、杖の頭に登つている。

『おのれ、貴樣までが生意氣な！』

云いながらふり落とそうとしたが、四本の脚の外に、蛇のような尻尾をからみつけているので、なか〳〵放されそうもない。無理に振ろうとすればまた横になる。横にしてわ大變と南無坊もちよ

つと持てあましたが、その時ふと久太郎の方を見ると、これわ口わ利けないのだが、頭だけわ動かせるので、それをはげしく縦にふつた。

で、はじめて氣がついて、

『オヽ、そうだつた。』

といゝながら、錫杖をちようどその頭のように、縦にトンと地突きした。

すると忽ち猿犬わ、キヤツといつて眞逆樣に、杖の頭から跳ねおとされ、そのまゝどこえか消えてしまつた。

『ハヽヽ、馬鹿な奴等が……』

南無坊わ笑いながら四邊を見まわし、もう小僧も猿犬も、影さえ見えないのに安堵して、更にまた久太郎に向い、

『こりや何うしたということなのだ？』

もう一度聞いて見た。

すると久太郎わ、眼からハラ〳〵と涙をこぼしたが、その癖顏のしかんで居ないのを見ると、それわ嬉し涙でもあつたか。

兎角口が利けないのだから、何をいうのだかわからないが、又しても奥の方をさして、顏を斜めにむけるのわ、何だか門の內えはいれというのらしい。

そこで南無坊わ心得て、

『この門明けろ！』

といゝながら、錫杖をトンと突くと、扉わパッと左右に明いた。

なんの造作もないこと。これならはやくそうすればよかつたと思いながら。ズツと入ろうとすると、こわいかに今明いた門わ、また前に現われて、扉をちやんと閉じている。

オヤと思いながら、杖を突くと、すぐまた明いて通れるが、通つたと思うとまた元のとうり、前に門が立ち塞がる。

『よしこうなれば根くらべだぞ。』

と、南無坊わ門の出來るたびに、錫杖を鳴らして明けて通るが、その度にまた門ができるので、つまりわ同じところにじだんだ踏むようなものだ。

こんなことを繰りかえすこと、およそ五百五十遍ばかり。今わさすがの南無坊も、腕がすつかりくたびれて、錫杖を突き鳴らす力もなくなつた。

けれどもこゝが大切のところと、心の中に地藏經を誦えながら。なおもはげしく突くこと三度、ちようど三百三十三遍目になると、門わサツと開いたまゝ、再び扉を閉じることなく、その代りに可愛い少年が、三人ばかりそこに現われた。

『これわようこそ、南無坊さま！　不二丸さまにもさきほどから、お待兼でございます。』

と、さも丁寧に出迎えた。

が、南無坊わまだ氣をゆるさない。

『おのれまた手をかえて、此方を油斷させる氣だな。』

と、思いながらも、わざと落ちついて、

『オ、、出迎御苦勞ぢやな！　して、不二丸殿わどこにいらるゝ。』

『何卒お出でくださいますように！』

と、三人わ先に立つた。

南無坊わ案内されるまゝに、その少年等の後について行くと、やがてりつぱな玄關え來たが、見るとその上の鴨居が、普通のところよりグツと下がつていて、少年等わ立つたまゝ通れるが、坊のような大男わ、どうしても頭をかゞめなければならない。したがつて、持つている錫杖も、自然横になる勘定になつた。

と、見てとるとはやくもさとつて、又一つトンと突くと、ふしぎにも鴨居がグツと上つて、樂に通れるようになつた。

で、ずつと上にあがると、それから先の鴨居わ皆高く成ていて、別に邪魔にもならなかつたが、いよ〳〵座敷にとうされて、設けの座になおろうとする時、少年が側えきて、

『お杖をおあづかりもうしましょう。』

という。

どつこいその手わ食わんぞと、南無坊わ頭をふつて、

『イヽヤ、これわ大切な物ぢや。放すことわならん。』

というと、少年わニヤリ笑つたまゝ、仕方がなしに引きさがつた。

ところえ彼方の襖があいて、不二丸わそれえあらわれたが、

『オヽ、御坊！　お待ち申しておりましたぞ。』

と、相變らず愛想よく挨拶する。此方もおとなしく、

『イヤ、此間わいろ〳〵御厄介でした。』

と、何氣なく答禮をしたが、例の錫杖わ少しも横にしない。

不二丸もさすが曲者だ。こうした異樣な物を持つているのを、わざと目にも止めない風で、

『しばらくお見えなかつたが、何所えいつてござつた。』

『貴君の御郷里えいつてきました。いろ〳〵御傳言もございましたぞ。』

と、眞正面からぶちまけてかゝつた。が、不二丸も驚かず、

『大方そんなことだと思いましたぢや。して見ると兄貴から魔魅玉のことも聞いてござつたな。イヤ、それでまた大王から、取りもどしも頼まれてござつたろう。ハヽヽヽ。御苦勞なことぢや。』

と、どこまでも見拔くこと、こゝにも淨玻璃の鏡がある樣だ。

南無坊もかえつて先手をうたれたようだが、こゝぞと下腹に力をこめて、グツと糞度胸をすえながら、

『それほど承知なら文句わいらん。その魔魅玉をお返し下さい。』

『元よりお返し申そうと思えばこそ、こゝまでお迎え申したのぢや。』

と、いゝながら懷中をさぐると、先に淨玻璃で見た通りの、金襴の袋を取りだしたが、わざとそのまゝにわ渡さず、紐を解いて口をあけると、

『それ、この通りぢや、お持ちなさい。』

と、自分の前え轉がした。

見るとこの玉わ、眞圓でわあるが、水晶とも寶玉ともつかず、轉げるたびに色が變つて、五色にも七色にも見える、いかにも稀代な玉だが、それがまたまるで水銀のように、いかにもはしこく轉がるので、容易に止まるところが知れない。

不二丸わ南無坊に、

『はやく拾つて見なさい。』

『心得た。』

と云いながら、立ちあがつて進みよつたが、玉わまるで生ある物のように、また床の上を轉げている。走りよつて捉えようとしても、なか〳〵南無坊の手にわ負えない。

その中ちようど五六尺の先に、ようやく玉が止まつたので、今こそと進みかけると、何うしたものか足がすくんで、少しも前え出られない。

こうなつてわ仕方がない。手の代りに錫杖を延ばして、その玉をかきよせようとした。これが南無坊一期の不覺だ。

立つたまゝで杖をのばせば、どうしても杖が横になる。横になつたと思うと、その杖が急に重くなつてしまつて、とても手にわ持ちきれず、バタリ放して下に落とした。

その時ハツと氣がついて、慌てゝ拾つたがもう追つかない。

今まで錫杖だつたと思つたのわ、何時か太い石の柱になつて、自分わそれに縛りつけられてしまつた。

『エイ、殘念な！』

と、もがいて見ても、今わどうすることもできない。

不二丸わせゝら笑いながら、

『ハヽヽ、入らぬ物ならあげぬばかりぢや。』

と、玉を拾つて袋におさめ、

『玉の代りに石を抱いた、あの罪もない顏わどうぢやろ。』

と、飽くまで嘲りながら、悠々と立つていく。

『こりや待て不二丸！』

と、いう間にわ、もう三人の少年がきて、石に括られたまゝの南無坊を、さも輕々と擔ぎながら、運びこんできたところわ、ちようど以前の裏門の前！　そこにわ例の久太郎が、同じように石の柱にくゝられ、立往生をしているところなのであつた。

終篇　錫杖の奇特

南無坊わ、胴あげでもされるような形で、以前の裏門のところえ運びこまれた。一期の不覺と觀念した坊わ、今わたゞ石のように、身動きもせず眼を閉じ、同じく結んだ口の中で、一心に地藏經を念ずるばかりだ。もつともその心でわ、先刻あれほどいましめられてあつた、——決して杖を横にするなといわれた、それをつい忘れてしまつた。いや、汰して忘れたのでわないが、勢いそうしなければならなくなつた。——いよ〳〵自分の法力が、魔力に負けてしまつたことを、心から恥じもし、また詫びもしたのである。

その中に二人の少年わ、なにかうなづきあうと、南無坊を括りつけた石を、前からの久太郎の柱にならべて、門の左右におし立てた。なんのことわない、お宮の門の高麗犬という風に。但し久太郎わ黑いのに、南無坊の方わ白くなつている。

ところえまた不二丸わ、それを檢分にやつて來た。

『オ、それでよし〳〵。陰陽の柱がちようど揃つた。』

と、さも満足の體である。黒いのが陰、白いのが陽のつもりだろう。

するとまた少年わ、

『地獄の見る目、嗅ぐ鼻も、ちようどこんな風でございますか。』

『ウン、これで閻魔にもう負けんぞ。たゞ、それにわこうしてやらなければ……』

と、云いながら、柱の前えよつてきて、久太郎と南無坊の、顔を輕く三ツづゝ叩いた。

すると、久太郎わ目を見はり、南無坊わ鼻を鳴らしはじめた。

不二丸わいよ〳〵得意になつて、

『ソレ、これで不思議長屋に、また一つの不思議がふえたぞ。みんな來て見ろ〳〵！』

というと、今まで二人の目に覺えのある、變な小僧や、妙な獸や、鬼瓦や、野良猫をはじめ、奥庭の仕合に現われた、少年隊の連中まで、ゾロ〳〵そこに現われて、めづらしそうに二人を見る。

その眼にわいうまでもなく、嘲りさげすむ色が見えている。

この時不二丸わ少年を見かえり、

『先刻の杖わどうした？』

と聞くと、

『お藏え納めておきました。』

『もう好いから持つてこい！』

『ハツ。』

少年が急いで行つたと思うと、間もなくあの錫杖を、二人で大切にかついできた。かつぐのだから、無論横にしている。

これを見ると南無坊わ、

『ハ、ア、此奴等、まだ杖の持ち方を知らんな。……その分なら案じることわないぞ。』

と、腹の中で考えたら、やがてその杖が、不二丸の手にわたつて、不二丸が縦にトンと突いたと思うと、急にこつちの體がしびれて、まるでなんの感じもなく、ほんとの石にでもなつたようになる。

不二丸わいよ〳〵得意で、

『皆もよく見ろ！　これが賽の河原の地藏の杖だ。おれもかねて欲しいと思つておつたが、幸のことで手に入つた。この杖までこつちの物になれば、もうこれからわ閻魔と地藏を、おれ一人で兼ねてやる。どうだえらいものだろう。』

と、また一つトンと突くと、その突き方が強かつたので、杖の頭につけてあつた、錫の金物がポロリとぬけて、下えガサリと落ちたでわないか。

不二丸わ驚いて、

『コレ、はやくそれを取れ！』

と、いうので少年が拾いあげ、重そうに不二丸に渡す。不二丸わ元の通り、その杖の尖につけようとする。それでまた杖を横にした。

杖が横になるとまた、すぐに南無坊わ元氣づく。

『ヤ、彼奴め杖が分に過ぎるので、あんな粗忽をしおつたな。』

と、思つている間に不二丸が、杖を元の通りにして、また縦に突きなおすと、坊の方わまた意氣地もなく、たゞかしこまつてしまうのである。

その間に家來の魔物どもわ、なにかガヤ〳〵話しあつていたが、この時不二丸に向つて、

『いかゞでござりましよう。こういうおめでたい時でございますから、いつもの踊りをいたしましようか。』

『ウン、よかろう。でわ、おれが音頭をとつてやる。……用意！』

『はア！』

『……三ン四、ソレ！』

というと、魔物どもわ手足を動かして、不思議な形で踊りだした。それは皆不二丸の、杖を突きながらの拍子に乗つて、手であるいて足でおどる者、足をからみ合つて二人でおどる者、首ばかり動かして棒立になつている者、腹を叩いて太鼓に代えている者、とても餘所でわ見られない、珍々

奇手烈な踊りだが、これがはじまると不二丸も、だん〳〵夢中になつて來て、はげしく拍子をとりはじめる。その度に杖の錫を、シヤリン〳〵と鳴らしながら、自分も踊るようになつたが、はてまた杖からぬけて、下えガサリと落ちてしまつた。

その時不二丸わ氣がついて、慌てゝ子分どもを制して、それを拾わせようとしたが、彼等わもう浮かれに浮かれて、正體もなく踊つているので、不二丸の聲も耳に入らない。

そればかりか踊りまわり、狂いまわる間に、落ちた錫を足のさきで、あつちえ蹴飛ばしこつちえ跳ね退け、どこえ行つたか解らないようにしてしまつた。

不二丸わ仕方がなく、

『コレ、待て〳〵！』

いゝながら、自分でそれを捜がそうとする。そうして體を屈ませれば、勢い杖まで横になつてくる。

杖が横になりはじめると、南無坊わまた元氣づく。そして例の鼻を利かせると、たしかに近く錫の香がする。

『オイ、弱見君！　君わ眼が利くはずだ。其邊に錫わ見えないか。』

と、隣の久太郎に聲をかけると、これも今わ口まで利けた。

『ウン、ある〳〵。ちようど君の左の方の、三尺ばかりのところまできた。』

『そりや有りがたいな……だが、まだ體が利かん、手が屆かん。』
『オツと少しはなれたぞ。誰かまたけとばしたな。』
『まだ不二丸わ拾わんネ。』
『拾うどころか、まるで見當ちがいを捜がしてる。』
『よし、それぢやア君わその利く眼で、よく不二丸を見てゝくれたまえ！』
『そつちを見てると錫の方が……』
『イヤ、杖わわしがひきうけた。』
と、南無坊わ鼻をひろげて、しきりにそれを嗅いでいる。敵からつけられた魔の力が、却つて今わ此方の役にたつ。その中に南無坊の鼻にわ、變つた香が嗅ぎこまれた。
『まてよ……、これわ先刻の魔魅玉の香だ。』
いうと久太郎も何か見つけて、
『オツ、不二丸の懐中から、何だか落ちかけている物がある。』
『どんな物だ。』
『大そう立派な袋のようなものだ。』
『オヽ、それでわいよ〳〵魔魅玉だ。あの杖の横になつている間に……そうだ〳〵。』
と、うなづくと、南無坊わまた心づいて。今度わ誰に遠慮もなく、聲のありたけを振りしぼつて、

地藏經を唱えあげた。
するとその讀経の功力が、だん〳〵現われてきたと見えて、自分の體わいうまでもなく、久太郎まで次第に力づいてきて、今わおとなしく縛られていない。
それツといいながら二人とも、身をふるわせると石の柱をはなれた。離れると急に勇氣が出、中にも久太郎わさすがに武士、今まで縛りつけられていた、その石柱を引抱えるがはやいか、いきなり魔物どもを薙ぎたてた。
南無坊わまた南無坊で、すかさず飛びかゝつて、錫を拾いあげ、それをさかんに振り鳴らしながら、なおも地藏經を唱えたてる。
それにひきかえ魔物どもわ、先刻から踊りまわつて、すつかり體がくたびれているところえ、急に敵手の元氣が出たので、一方ならず面喰つた。
ことに大將の不二丸わ、杖と一しよに體を横にして、錫を捜しまわる間に、大切の魔魅玉の落ちかけるのさえ、氣のつかない程うろたえている。
そこをねらつて南無坊わ、まづ手にした錫で、その頭を一つくらわし、よろけるところを手をのばして、落ちかけている魔魅玉と、その袋とを引奪つた。
『オ、それわ！』
と、取りかえしにくる。そこをまた錫で拂うと、先方わさも眩しそうに、眼を抑えて後にさがつ

た。ところえ久太郎の振りまわした石柱が、ちようど當つて來たからたまらない。頭を忽ちぶちこわされて、アツというと打倒れた。

途端に他の魔物共わ、一時にバタ〳〵と、倒れ散つてしまつたと思うと、あとわ南無坊と久太郎、

『オ、無事か。』

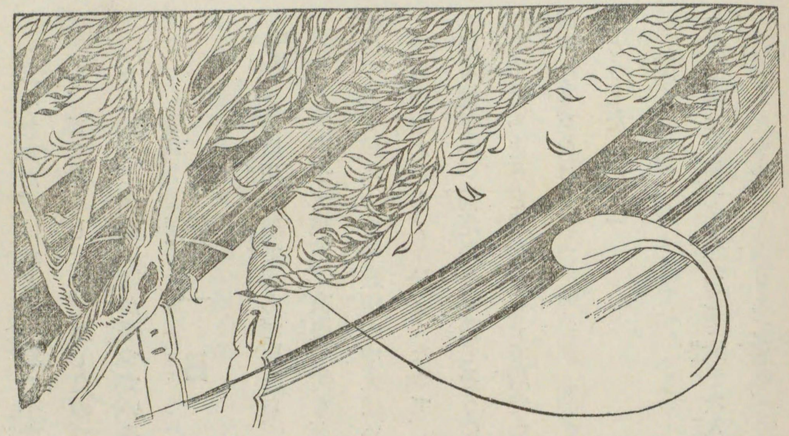
『うまく行つたな。』

と、互いに喜びの顔を合わせたが、すぐいままでの魔物どもの、死骸をあらためようとしたら、こわ如何に、不二丸はじめ他の魔物どもの、影も形も其邊にわなく、代りに二人の目に入つたのわ、古びた大小の鬼瓦が、粉微塵に打ち碎かれて、さながら大伽藍の燒跡のように、あたりに散らばつているのであつた。

そして魔魅玉や、錫杖わと見るのに、そんな物わ何もなく、南無坊わもとの旅僧、久太郎わ武者修行者。互いに顔を見あわせて、

『なるほどこれわ不思議長屋ぢや。』

と、苦笑をするばかりであつた。



平太郎化物日記

はしがき

世にふじみという體がある。それわいくら打たれても、突かれても、少しも痛くないという人の事だ。それと同じ様に、いくらおどされてもこわくない者がある。それわ心のふじみとでも云うのか。昔備後の國に稲生平太郎という少年があつた。稲生武左衛門という者の子だつたが、どういうものか生れついて、至つて剛氣な子で、ある夜友人共と膽だめしに、例の百物語をした揚句、近所の比熊山という山え登り、その頂上の古塚の——それに觸つてわならぬという——恐い云傳のある所まで、かまわず見届けて來たのが基で、其後滿一ケ月ばかり、毎晩化物に

おそわれた。けれども平氣の平太郎わ、少しもそれにヘコたれず、いくら恐い目を見せられても、ビクともしないで通したので、とうく〳〵その化物の方が、根負けをして引きあげてしまつたと云う、名高い話が殘つている。それをいま日記體に、書き直して見るとまづこんなもの。

第一日　七月一日

夕方原川の磧で涼んで居たら、急に比熊山の方から、眞黒な雲がわいて來て、はげしい夕立になつて來た。衣服も何もグッショリになつたから、いそいで家え歸り、濡れた帷子を衣桁に干して、そのまゝ蚊帳の中えはいつてしまつた。

その中雨わだん〳〵ひどくなつて、雷も鳴り出して來たが、ちようど眞夜半頃だ。次の間に寢て居る權平が、何だかさも苦しそうに、ウヽンヽンヽ〳〵と唸りだした。

ぼくわちようど目を覺まして居たから、そこえ行つて起してやると、權平わやつと氣がついたが、體中汗ビッショリ。

『どうしたんだ?』

と聞くと、

『今しがた、何でも恐ろしく大きな入道が、私をつかまえに參りましたので。』

と、まだブル〳〵ふるえて居る。

『馬鹿な。そりやア夢だよ。胸の上に手でものつてたんだろう。』

と、ぼくわ笑つてやつたが、

『そうでもございましようか。でわ……氣をつけてやすみます。どうも飛んだ御心配かけまして……』

と、きまり惡そうに又寢たが、間も無く又前の様に、ウヽンヽンヽ〳〵と唸り出すから、もう一遍行つて起こそうとすると、今度わ彼方から逃げて來て、

『どうも夢でわございません。た、たしかに化物でございます。』

と云う。

『そんな事があるものか。』

と叱りつけて又寢かしたが、その中雨がやんだと思うと、急に凄い風が吹きこんで、家中の灯が消えてしまつた。けれどもぼくわ、どうせ寢るのだから暗くてもいゝと、そのまゝうつちやつておくと、急にまた次の間の障子が、パッと眞赤になつて來た。火事ぢやないかと思つたから、飛びおきて行つて明けようとするのに、どうしたのだかちつとも明かない。オヤ變だなと、力を入れて引いても、おしても、まるで釘づけになつた樣だ。その中に又障子が眞暗になつた。いよ〳〵これわ怪しいと思つて、外をあらためて見ようとするが　どうしても明かないから、まゝよ破れてもかまわんぞと、足を柱えかけて、力一杯グイとやると、障子わこわれてやつと明いた。

ところがそれが明いた拍子に、何だかぼくの肩と帯とえ、手をかけて前え引ばる様にするから、ぼくわ敷居に足をかけ、柱を手でつかまえて、引ばられまいと踏ばるのに、體中が痛くなるくらいだ。一體これわ何だろうと思う中、パツと又明るくなつたから、その時よく見たら、これわ丸太に毛の生えた様なもので、何だか大佛の指の様にも思える。

指なら何所かに手があるのだろうと、その指の本を見ると、こわいかに、向うの家の棟の上に、お月様が二つ出たような、大きな目玉がならんで居て、それをカツと明けた時わ、まるで晝間の様に明いが　つぶつてしまうと又眞暗になる。さつきからの不思議わこれで正體が解つた。

さてわ權平の云つたのも、全く夢でわなかつたかと、ぼくもはじめて解つたが、元よりこんな奴に驚くのぢやない。彼方で目をあけた時わ、此方からもグツと睨み返してやると、彼方わ目をふさいでしまつた。ぼくわ大聲で、

『權平々々！刀持つて來い、刀！　刀！』

と呼んだが、どうしたのかちつとも返事がない。

その間もぼくの肩わ、しきりに化物に引かれるから、尚力一杯身をふつたら、その彈みに衣服がビリ〳〵とさけて、ぼくわ後え尻餅をついた。けれども直ぐ起き上り、刀を取つて來て又出ようとすると、急に奥の室が光りだした。

さてわ化物わ緣の下えまわつたかと、疊ごしに刺してやろうとすると、疊が一時に飛び上つて、

座敷中をおどりまわり、その中誰かゞあつめる様に、中央え來て積み上つたが、ぼくの立つて居る所だけわ、疊も動かず一枚だけ殘つた。

此時表の戸をドン〳〵叩く者がある。さてわ又化物かと、刀をさげたまゝ明けて出ると、これわ隣の三井君だつたが、

『何うしたんだ？』

と云うから、

『君こそ何うして來たんだ？』

と聞きかえすと、

『大きな聲で、刀々つて云うのが聞えたから、只事でないと思つてやつて來た。』

『それわ有がとう。實わこう云う譯なんだ。』

と、先刻からの事を話すと、三井君も驚いて、

『それぢやア云うが、おれも今此所え來る時、途中で小坊主が茶碗をもつて通る所を見かけたが、すれちがつたら急に體がしびれて、しばらく歩けない様になつてしまつた。』

と云う。さてわそれも化物の所業だろうと、二人わ顏を見合わせたが、此時わもう何の不思議もないので、何を相手にすることも出來なかつた。此時見ると、權平わ疊の上から投り出されて、眞青になつて氣絕して居るから、顏え水を吹いて呼び生かしてやつたが、まだ口も利けないでガタ

〳〵ふるえていた。

そちこちする中に、もう夜が明けた。そこで疊を敷直して、昨夜の取り返しにグッスリ寢た。

第二日　七月二日

昨夜の事がもう大評判になつた。それわ家來の權平が、さも自分一人で見た事の樣に、近所をふれてまわつたからだろう。

すると親類や友達をはじめ、まだろくにつき合わないものまで、皆見舞にやつて來た。そして、

『そんな化物屋敷にわ、もう一刻も居られないから、早く本家え引きあげろ！』

と、心配して云つてくれるけれど、

『ぼくも武士の子だ。あんな化物なんぞが恐くてどうする。正體を見屆けないうちわ、決して此家わ出ない。』

と云つてやつた。尤も弟の勝彌わ幼いから、怪我があつてわならぬし、第一足手まといだから、それ丈わ本家え預ける事にした。

ところが例の權平わ、是非お暇を願い度いと云う。それも無理わないが、マア一人でも不自由だから、それでわ化物を退治するまで、晝間丈の勤めにして、夜わ自分の家え歸えしてやる事にした。

さてその晝の間わ、元より何の不思議も無かつたが、日が暮れると友達五六人、物ずきにやつて來て、恐い物見度さにお伽をする事になつた。

それで皆奥の座敷に、車座になつて話して居たが、やがて十二時頃になると、變に凄味が出て來て、そろ〳〵化物がいたづらをはじめた。

まづ座敷に敷いてある疊が、だしぬけにポコリ〳〵と、下から五六寸宛持ちあがるのだ。

それを見ると、今まで強がつて居た連中も、急に顏の色を變えて、何れも逃腰になつて來た。ところをぼくわわざと落ついて、

『ナニ、こんな事わお茶の子だよ。今に面白いから見て居たまえ！　それまでぼくわ失敬して、今の中に寢ておこう。何しろ昨夜わろくに寢ないんだから。』

と、蚊帳の中えはいつてしまつた

その中に、疊の上るのが段々はげしくなると、連中わもうたまらなくなつて、一人が用があると云い出すと、私も思い出した事があつたと、めい〳〵うまい事を云つて歸り出し、中にわろくに暇乞いもしないで、幽靈の樣にドロンと消えて、誰も居なくなつてしまつた。

ところが却つて此晩わ、このまゝ別に變つた事もなく、疊の持上がるのも、次第にしづまつたから、おかげでぼくわ夜の明けるまで、グツスリ休む事が出來た。元よりたつた一人ぼつちで。

第三日　七月三日

朝早く權平がやつて來て、

『昨晩わ如何でございました?』

と聞くから、

『イヤ、大した事もなかつたよ。もうあれきりで濟んだんだろう。』

と云つておいたが、夜になると又近所の連中が、五六人やつて來て、

『今晩わ私共がお伽致します。』

と、座敷で茶をのんで話して居た。

ところが今夜わ、まだ十時にもならない中から、だしぬけにドロ〳〵と云う物音がした。オヤツと思うと、家中がユサ〳〵搖れ出したから、

『ソレ地震だ。』

と、皆おもてえ飛び出したから、ぼくも庭まで出て見たが、グラ〳〵ガタ〳〵云つて居るのわ、只ぼくの家ばかりで、隣の家わ塀も動いて居ない。

さてわまた例の奴だなと、ぼくわ又家の中に入ると、相變らずガタ〳〵ミシ〳〵、家鳴震動わうるさいが、外にわ何の事もないので、しまいにわ船にでものつて居る氣で、ゆられながら寢てしまつた。

第四日　七月四日

いよ〳〵評判が高くなつて、夕方からわもう門の前わ、見物人で山をつくる樣になつた。

『一體どう云うわけでしよう?』『狐か狸のいたづらですよ。』『いゝえ、何かの祟りでしよう。』『それとも家相が惡いのか。』などと皆取沙汰をして居る。

その癖かんじんの夜が更けて、これから化物が出ようと云う時分にわ、その見物も大方減つてしまい、只例の五六人だけ殘つて、

『今夜わ妙だな、別に變つた事もない樣だぞ、』

と、欠伸をかみころして居ると、急にヒユーと音がして、又家が動き出した。昨夜わ地震、今日わ大風かと、ぼくわ平氣で寢て居たが、他の者わ又恐がつて、みんな自分の家え引きあげてしまつた。

それでも別に何事も起らないので、却つてつまらない事だつた。

第五日　七月五日

今夜も見物わ門前に集まり、中にわ辨當をだしかけたり、瓢箪の酒をのんだりして居るものもある。まるでお花見にでも行つた氣だ。そのくせ門の中えわ入る者がない。

今日わ日が暮れると雨が降りだした。ところえ兄の新八殿が來られた。一緒に奥で話していると、玄關のしまつている戸の節穴から、兄さんの下駄がスウツと入つて來て、座敷中を飛びまわるのが、まるで誰か穿いていて、その人ばかりが見えないと云つた風だ。

兄さんも驚いて、

『なるほどこれわ變だぞ。』

と云つたが、

『ちようどいゝ所え來ましたね。昨夜わこんな曲藝わありませんでしたよ。』

と、ぼくが落ついてたので、あきれてそのまゝ歸つて行つた。その時も氣味惡がつて、ぼくの下駄をはいて行つた。

第六日　七月六日

あんまり、門前の見物がうるさいので、役所から人が來て、それを追拂うようになつた。それでもまだやつて來る。まるで飯の上の蠅のようだ。

ちようど正午過ぎ、本家の新八殿が、他に一人の友達をつれて見舞いに來られた。三人座敷で話をしていると、いきなり何所からか宙をきつて、刀が拔身のまゝ飛んできて、新八殿の着て居る帷子の、右の袖を少し切つて、後の唐紙えズブリとさゝつた。皆わギヨツとして、顏色もなかつたが、

そのまゝ刀わ動かずにいるから、取りあえず唐紙から拔いて見ると、これわ豫て家來の者に、貸してあつた刀だつた。それにしても鞘わ何所にあるだろうと家中を探してみたが、何所にも見當らない。

『ハテ變だなア。』

と云つていると、

『とんと此所に。』

と云う聲がする。

誰かいるのかとさがして見たが、他に居あわせた者わない。只その聲わ、なお同じ見當で、

『とんと此所に、とんと此所に。』

と云つている。よく聞くとその聲わ、座敷にかけてある額の後のようだから、念のためにその額をはづしたら、そこからバタリと落たものがある。よく見たら、それがその刀の鞘でわないか。

化物も今日わ手をかえて、變つた事をするなアと思つたが、新八殿わ氣味惡がつて、そこ〳〵に歸つて行つてしまつた。

さて夕方になつて、一ト風呂入つて休んでいると、そこえ川田の茂左衞門殿（叔父）が、堀場の權右衞門さんを連れてやつて來た。やはり化物見舞なのだ。

『今夜わおれ達二人が伽をしてやる。』

と、初めの中わ元氣がよかつたが、やがて夜半の頃になると、臺所で何やら音がするので、のぞいて見ると、白い大きな丸い物が、フワリフワリと宙を舞つている。

『アレ御覽なさい！　そろ〳〵はじめました。』

と、云つたら、叔父さん達わ一寸見たが、相手にならない方がいゝと思つたか、そのまゝ知らん顏で話をつゞけた。

するとその白い塊が、だん〳〵座敷の方えやつて來て、叔父さん達の話している、頭の上えバタリと落ちて來た。

二人わワツと云つて飛びのいたが、そのまゝ手も出さないでいる。ぼくわかまわずその落ちた物を、よく檢めて見たら、それわ物置にすてゝあつた、鹽俵の古いのであつた。

『何だこんな物！』

と、ぼくわそのまゝ庭え投り出してしまつた、それきりもう動き出さない。けれども叔父さん達わ物も云わずに、そのまゝコソ〳〵と歸つて行つてしまつた。

第七日　七月七日

今日わ七夕さまだ。それでその御祝儀を云いに、義兄さんや叔父さんをはじめ、知つている家を二三軒まわつたが、行く所々で化物の話が出る。けれどもぼくわうるさいから、別に委しい事わ話さないで歸つた。

夕方から雲がでゝ、やがて一しきり夕立が來たが、今夜わ誰もお伽の人が來ない。實わ來ない方が、世話がやけなくてよいと、ぼくわ一人で涼んでいたが、その中茶を入れようと思つて、臺所え行こうとすると、その入口の所一ぱいに、大きな白い袖がひろがつている。

『ヤ、此奴わ面白い。』

と見ていると、その袖から、大きな摺子木が出てきた。ところがその摺子木のさきが、毛むくじやらの手首になつて、その指のある所から、同じ樣な小さな手が出て、その又さきから手が生えたところ、何の事わない、まるでサボテンでも見る樣だ。

そして、その手から出た手の、そのまた手から出た手のさきが、みなウヨ〳〵と動いている。あまり感じの好いものでわない。

『馬鹿な眞似するな。』

と、ぼくわその手を捕えようとすると、フツと消えたが、また彼方え出て同じ樣に動いている。面倒だからそのまゝにして、やかて蚊帳を吊つて寢ようとすると、今度わ蚊帳の中え、その手がでゝ、ぼくの顏を撫でまわす。それがいやに冷いから、『エイ』と云つてはらいのけると、すぐに消えたが、またやつて來る。このために曉方まで、ろく〳〵寢られないにわ少々弱つた。

第八日　七月八日

昨夜の摺子木の化物にわ、ぼくも安眼を妨害されたので、今日わ朝からねむくてならない。午後から近所の若い者が來たから、この事を話すと、それでわ今夜わ私達が引きうけるから、お前さんわゆつくり寢て下さいと云う。

あまりアテにもならないけれども、よろしく頼むと云う事にして、ぼくわ宵の中から床え入つた。

この時、三井の權八も來たので、若い者達も氣が強くなつて。座敷で賑かに話していた。今夜も宵に夕立があつたおかげで、更けてからわ大分涼しくなつたので、ぼくわおかげで寢心もよく、しばらくわ正體なかつた。

すると夜半の頃、何だか座敷がさわがしいから、ぼくも目をさまして行つて見ると、まるで煤拂でもした様に、座敷中の疊が上つて、埃のモウ〳〵立つているなかに、皆わワイ〳〵立ち騒いでいる。

『一體何うしたんだ？』と聞いてみると、

『大變だ〳〵。今この座敷中の疊が、みんなひとりでにはね上つて、とても坐つちや居られないんだ。なるほど、こんな物騒な家にわとても長居わできない。』

と、若い者わ皆逃げ出してしまつたが、權八だけわ殘つていたので、ぼくと二人でその疊を、また元の通り敷き直してやるのに、もう今度わ動かなくなつた。

第九日　七月九日

今日わ朝の中から度々家鳴がした。その中に夜になつたが、昨夜で懲りたとみえて、今夜わ若い者も來ないのに、權八だけわ氣にしてまたやつて來た。けれども顏色が好くないから、

『君、何うかしたのか。』と聞くと、

『實わ君、この間の晩から、少し熱があつて、どうも食事がうまくないんだ。』

『この間の晩からとわ？』

『アノそら、君が大きな聲でどなつた晩さ。ぼくわ驚いてかけつけたが、途中で變な小僧に會つたと云つたろう。あの時、いやな氣持がしたが、考えて見ると、やつぱり化物の毒氣にあたつたんだろう。忌々しいが仕方がない。』と、さも悔しそうに云う。

『そんならぼくが仇を打つてやるから、無理をしないで休んでたまえ！　加勢に來てくれたのわ有がたいが、尙惡くなると氣の毒だ。なアに、あんな化物の奴、ぼく一人で澤山だよ。』

『ほんとに君わ強いもんだネ。』と、感心しながら歸つて行く。ぼくわ送り出しながら、

『今に化物を生捕つたら、知らせにやるから見に來たまえよ。』と、こんな冗談をいつて別れた。

化物も、何所かで聞いてたかも知れないが、何故か今夜わ出てこないで、只家鳴りばかりさせていたから、何所を風が吹くかと思いながら、そのまゝゆつくり寝てしまつた。

第十日　七月十日

昨日から今日えかけてわ、別に變つた事もなく、たゞ時々家鳴りがするばかりだ。

午後、上田治部左衛門という方が來られ、この間からの話を聞かせろと云う。それで委しく話すと、

『それわきつと狐狸か、またわ猫又の所爲に相違ない。そんなら穿をかけるが一番だ。幸い私わ好い穿のかけ方を知つているから、明日の晩までにこしらえてあげよう。』

と、親切に云つて歸られたが、なんの、この間からの化物の樣子でわ、そんな生やさしい物でもないらしい。

日が暮れてから緣側えでゝ、月を眺めていたが、座敷の方が急に明るくなつたから、ふりかえつて見ると、其所に置いてあつた行燈の火が、大そう大きくなつている。用心が悪いから消そうとすると、直ぐ細くなつてしまつたが、その代り長く〳〵立つて、天井えも屆きそうになつた。

さてわ燃えつくかと思うと、また短くなつてしまう。何の事だと思いながら、やがて寢床えはいつたが、それ丈のことで、別に變つた事もなかつた。

第十一日　七月十一日

治部左衛門さんが、穿を持つて來てくれた。それわ三年竹の、性の好いのでこしらえた、強いバネのついたはね穿で、餌にわ鼠の油揚げがつけてあつた。これを裏の庭にしかけて、

これなら大丈夫と得意になつて歸られた。

夜になつたが、例のとうり家鳴りと疊跳りばかりで、他にわ別に變りもない。念のために穿のところえ行つて見たが、まだ何の來た樣子もなかつた。

第十二日　七月十二日

朝になるのを待ちかねて、もう一度行つて穿をあらためて見た。すると、そのつけてあつた餌が、きれいに取つてすてゝある。一たいこの餌にわ、誰でも一寸さわりさえすれば、すぐに強いバネがしまつて、忽ち穿にかゝるようになつているのに、それがきれいに解いてあるにわ感心した。

それにしても、餌だけわ食べたかと、思いながら見まわすと、これわ彼方の廂の下に、元の紐でつりさげてある。よく〳〵馬鹿にして居るでわないか。ところえ、治部左衛門さんがまた來られたが、この體を見ると悔しがり、

『ヨシ、今夜もう一度來たら、正體の知れる樣にしてやる。』

と、今度わ糠をもつてきて、穽のまわりにふりまいておいた。

ところが、夜になると、大分家鳴りがはげしくなつた。これわ化物も穽を見て、中ツ腹にでもなつたのだろう。その中に家根の上で、ドツと云う關の聲がきこえ出した。治部左衛門さんわそれを聞くと、

『さてわあれが天狗とおなじだな。天狗さまぢや穽も駄目かナ?』

と頭をかきながら、歸つて行かれた。

第十三日　七月十三日

夜が明けると、治部左衛門さんが又來られた。一緒に穽を檢めに行くと、其邊にまいてある糠の上に、犬の足跡の樣なものが、大小幾つとなくついているばかりか、別に二尺もあろうと思われる、大きな人間の足痕のあるにわ、皆開いた口がふさがらなかつた。

治部左衛門さんわ考えて、

『こりや、とても穽でわいけない。この上わ御祈禱の他わない。』

と、今度わ西鄕寺の和尙さんの所え行つて、化物退治の御祈禱を賴んでくれた。けれども和尙さんわ、何分この二三日わ、お盆の棚經で忙しいから、すぐに御祈禱わできないが、その代りよい物

を貸してあげようと、本堂にかざつてあつた藥師如來と、その前の香爐と、その臺とを持ち出して來た。

『これを何うするんです？』

と、聞くと、

『この藥師樣わ、あらたかな佛樣だから、いかなる化物も決してよりつけない。これをお前さんの居間にかざつて、たえずお香をたいて、ずいぶん信心しなさい！』

と云う。

治部右衞門さんわ歸つて來て、この通りぼくに話して、晩までに西鄕寺え行つて、あの三品を借りて來る樣にと云うのだ。ぼくわあまり感心しないけれども、老人の云うことだ、その親切を無に出來ないから、只へイ〳〵と云つておいた。

第十四日　七月十四日

夕方、治部左衞門さんの所から、鐵砲打ちの長倉という人をよこした。この人わ、若い時分から野山を狩りまわつて、力自慢の男だから、いろ〳〵の手柄話をしてきかせる。ついわ、ちようど好い所えきたから、西鄕寺え約束の佛具を借りに行つてくれと賴むと、

『よろしい、行つてもあげましようが、私わ今日はじめてきたので、評判の化物の不思議をまだ見

ない。今西郷寺から佛具を借りてくるもいゝが、その御利益で化物が出なくなつてしまうと、折角來たかいがないから、なにかいゝ恐い所を見せてもらつて、なるほどゝ思つたら、それから西郷寺え行つて上げましよう。』

と、いう。それも道理だから、そのまゝ話していると、そろ〳〵家鳴りがはじまつてきた。

『あれがそうかネ？』

『ナニ、あれわほんの前藝だよ。今に面白くなるから、見ていてごらん！』

と、いう中に坐つている下の疊が、ムクリ〳〵と起き上りはじめた。

『ヨウ、こいつわ本物だ。なるほど化物に相違ない。でわ西郷寺え行つてこよう。』

と、長倉わやがて出かけていつた。

ちようどその時わ、十三夜の月が、晝のように照つていたのだが、途中までいくと雲がでゝ、急に暗くなつてしまつた。すると彼方から、中村源太夫という人が、提灯をつけてやつてきて、

『オウ、長倉何所えいく？』

と、聞くから、

『西郷寺まで使に行きます。』

と、いうと、

『それわ御苦勞だな、生憎暗くなつてこまるだろう。私の家わもうぢきだから、この提灯を貸してやろう。』

と、親切にいつてくれたので、

『それぢやすみませんが、ちよつと拜借いたします。』

と、そのまゝ提灯を借りて出かけた。

ところが、それから少し行つて、津田市郎右衞門さんの家の前えくると、その角屋敷の藪の中から、笠袋のような黒い物が飛び出して、いきなり長倉の首にまきついた。長倉わ驚いて、アツといながら提灯をなげすてゝ、兩手でその物を除けようとするのに、どうしても取れないばかりか、だん〳〵つよく締めつけるので、しまいにわ聲を立てることもできず、そのまゝ氣絶してしまつた。

この時津田さんわ、ちようど庭で涼んでいたが、なんだかアツという聲がしたので、表え出て見ると、長倉が氣絶している。家來を呼んで、家の中えかつぎこませ、水を吹きかけて介抱すると、長倉わやつと氣がついたが、氣がついて見ると極りが悪いので、譯もいわずに逃げるように飛びだし、西郷寺えも行かないで引きかえしてきて、門の外から大聲に、

『今晩わもうおそくなりましたから、西郷寺えわ明日まいります。何れ明日！』

と、いつたきりで、そのまゝ自分の家え歸つてしまつた。初めにあまり大きなことを云つたので、化物も生意氣なと思つたのだろう、途中で待ち伏せしておどかしたのだつた。

その癖、後に聞いてみると、中村さんわこの時、外え出たこともなければ、途中で長倉に提灯を

貸したなぞわ、まるで覺のないことなのだそうだ。化物もなか〳〵いたづらをするよ。

第十五日　七月十五日

今日も一日何事もなかつたが、夕方になつたら、長倉が約束の御像や佛具を、西郷寺から借りてきてくれた。そして昨夜のことを話しながら、

『忌々しいから、今夜もう一度お伽をしましよう。そうして今度出てきたら、昨夜の遺趣返をしてやらなければ……。』

とてれかくしを云つたが、

『イヤ、なまじつかお伽の者がいると、かえつて化物がつけ上るから、私一人の方がいゝ。歸つてください！』

と云つたので、それ幸いに歸つてしまつた。

そこでまづ、借りてきた藥師様の懸物を床の間にかけ、卓や香爐をその前に置いてから、緣側え出て月をながめているうち、漸く凉しくなつてきたので、蚊帳えはいつて寢ようとすると、佛壇の前の唐紙が、ひとりでサラ〳〵と開きだした。オヤツと思つて見ていると、さつき床の間においた香爐や卓が、疊から三尺ばかりの宙のところを、ツウツと徐かに通つていくのが、まるで人が持つてゞもいくようで、やがて佛壇えはいつたと思うと、その前の唐紙が又しまつてしまつた。

『アハ、、、これわ世話なしで結構だつた。』

と、そのまゝ寢てしまつたが、折角借りてきた西郷寺の佛具も、これでわやつぱり御利益がないようだ。

第十六日　七月十六日

朝から小雨が降りだして、いやに蒸し〳〵する。それで湯もはやくつかつた。

お中元のことだから、いつもなら近所の者と一緒に、辻の盆踊りでも見に行くところだが、この頃わ化物が出るので、留守にしたら却つて不用心だと思つて、今夜も家にいることにした。

ところえ、津田の市郎右衛門さん、木全の伴吾さん、内田の源次さんの三人がやつてきて、

『今夜わ、おれ達が伽をするから、お前わ寢るがいゝ。』

と、云う。

『そんなら然う願います。』

と、ぼくわ蚊帳え入つてしまつた。

しばらくすると、何だかドスンという恐ろしい音が、臺所の方で聞えたので、ぼくも思わず目をさますと、先刻の三人わ座敷の中央に、眞蒼になつてかたまつている。

『何うしたんです？』

『先刻から裏の方でエイ〳〵いう聲がして、何だかかついでくる樣子だつたが、それがだん〳〵近くなつたと思つたら、其所え來てドシンといつて、何だか重い物を置いた樣なのだ。』

『何だか見て來ましたか？』と聞いたら、皆顏見合わせて返事もしない。

『それぢやア、私が行つて見てやろう。』

と、臺所え行つて見たら、これわ裏の物置に入れておいた、大きな漬物桶がおいてあるのだつた。

それにしても、あの物置にわ、ちやんと鍵がかけてあるのに、化物でもなけりやア持つて來られない筈だ。

するとまた昨夜のように、佛壇の唐紙がひとりでにあいて、あの西鄕寺の香爐と卓が、宙を通つて蚊帳のまわりをまわりだした。

三人わ驚いて、皆蚊帳の中えはいつてくると、卓も香爐も同じように、スウツと蚊帳の中え入つてくる。そしてその香爐が、まわりながら少しづゝ傾いて、三人の頭の上から、灰をこぼしかけるからたまらない。內田さんなぞわそれに驚いて、アツというはづみに、ゲロ〳〵〳〵と黃い反吐をはいて、他の二人の衣服をよごしたが、二人わそれをどうする事も出來ないくらいに、恐がつて身動さえしない。

仕方がないからぼくわ一人で、蚊帳をはづして掃除してやつたが、こんなことで夜も明けそうになつてくると、三人共ホウ〳〵の體で歸つてしまつた。

第十七日　七月十七日

今日わ藪入の日だ。川田の叔父、茂左衛門さんの所え遊びに行くと、親類の人が大勢きていて、酒盛がはじまつていたが、ぼくを見ると叔父さんわ、

『ヨウ、平太郎か、よくきた。お前の家にわ化物が出るそうで、伽に行つた者わ皆ひどく恐がつて歸るが、お前わまだ別に怪我もないか。』と、化物見舞をいう。

『ヘイ、別に何ともありません。あんまり皆が恐がるもんですから、面白がつていろんないたづらをするんです。』

『お前わまたどういうもんか、恐がらんにも程があるな。お前わそれでよいにした所で、今にもしものことでもあつた時、親類の者がうつちやつておいたようで、世間にも申譯がないから、どうだ何所かえ引越したら？　なんなら私の方えきておつてもよいぜ。』

と、いうと、他の人達も一しよになつて、

『それわ叔父さんのいう通りだ。お前もあんまり痩我慢をせずに、今の中にあの家を立退きなさい。』

『御親切わありがとうございますが、あの化物の正體を見屆けるまで、私わどこえも出ないつもりです。』

『ずいぶんお前も强情だなア。』

『そりやア強情かも知れませんが、こうなつたら化物と根くらべです。』
『そんならお前の勝手にしなさい。』
と、皆も匙をなげてしまつた。
ところが、其所を歸る時、出入の若い者の一人が、御馳走酒によつた勢で、
『今夜わ私がお相手いたしましよう。』
と、一しよについてやつて來るので、かまわないから連れて歸つたが、ぼくが緣側に涼んでいる間、その若者わ座敷で茶を飲んでいると、急に天井がメキ〳〵鳴り出して、だん〳〵下えさがつて來たと思うと、しまいに頭からおしつぶしそうになつた。
この體に若者わ、キヤツといつて庭え飛び出してしまつた。ぼくわその時居眠りをしていたが、その聲におどろいて起きあがり、それから蚊帳えはいつたが、今度わ天井も元のとうりになつて、別に動く樣子もなかつた。

第十八日　七月十八日

晝時分、上田治部左衛門さんが、狐除けの御守札を持つてきて、これわ西鄕寺さまで御祈禱をしていたゞいたのだから、大切にはつておくがいゝといつて行かれた。夕方から又遊びにこられて、一しよに緣側で話していながらも、

『今夜わ守札があるから、きつと何もなかろう。』
といつていると、彼方の山の端から、大きな月があがつてきた。
ところがその月の光が、此方の木立にさしたと思うと、いろ〳〵の木の間から、月と同じような光つた輪が、いくつも〳〵湧いて出て、それがちようど輪ちがいの紋のように、空をくる〳〵舞つてまわる。
治部左衛門さんわ驚いた。
『イヤこれわ〳〵！』とばかり、そこ〳〵に歸つて行こうとするから、
『まアいゝぢやありませんか。面白いから、もう少し見ていらつしやい！』
といつていると、今度わ臺所の方から、盥ほどの大きな輪が、クル〳〵まわりながらでゝきたが、見るとその輪の中にわ、ちやんと目鼻や口がついて、人の顏になつているのに、そのまた顏が笑つたり、睨んだり、いろ〳〵な眞似をするので、治部左衛門さんも氣味悪がつて、庭の方からでゝいくと、その輪ちがいが一しよになつて、
『ワハヽヽヽ、ワハヽヽヽ！』
と、勝閧のように笑いたてた。

第十九日　七月十九日

朝早く、治部左衛門さんが來られたが、

『昨日わ十分不思議を見たが、なるほどあれわ只の化物ぢやないな。お守札でも恐がらんところをみると、狐や狸でもないと見える。』

などと、感心していると、そこえ權八さんもきて、

『まつたく、只の化物ぢやありません。よく〳〵劫を經た魔物らしいのです。』

などと合槌をうつ。その顏のめつきりやつれて來ているのをみると、此間からよく〳〵魔力にかかつているらしいから、

『何しろ君わ、身體も弱つてるようだから、お見舞なんぞにきてくれるより、よく養生してもらつた方がいゝよ。』

と、云つてやつた。

その中、治部左衛門さんわ、昨夜のお守札を檢めていたが、

『ハテナ、こゝに妙な字で書きいれてあるぞ。前からこんな物があつたか。』

という。よく見ると、まつたく昨日わ見えなかつた梵字が、一字ちやんと書きいれてある。

『イヤ、これわ前にわありません。化物が昨夜書きいれてつたのでしよう。』

『ナニ、化物の書きいれ。そんなら大方出鱈目だろう、兎も角も聞いて見よう。』

と、早速西鄕寺の和尙さんを呼びにやつて、この文字を見せてきくと、

『ウン、これわ立派な梵字になつてる。こんなことをするところを見ると、まつたくこの化物わ、並大體の物でわありませんぞ。あなかしこ〳〵、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！』

と、舌をまいて歸つてしまつた。

さて今日の不思議わと見ると、家內中の道具が、しきりに宙を飛びまわることだ。茶碗、小鉢、煙草盆、果わ行燈なんぞにいたるまで、まるで羽根か足でも生えたように、右左とひとりで飛びまわる、なまじいに手をだすと、すぐに落ちたりぶつかつたりして、こなミジンにこわれてしまうが、うつちやつて置きさえすれば、今にも鴨居にぶち當りそうになつてわ、うまくちよいとよけて無事に通つて行き、行燈でもヨロ〳〵うごきながら、油一滴こぼさない。なか〳〵巧くやるものだと、ぼくわ曲藝でも見る氣で、面白いから見物していた。

その中夜になつたら、出入の者が三人で見舞にやつてきたが、茶の間で世間話をしていると、だしぬけに三人の背中を、一度にトンと叩く者がある。ビツクリしてふりむくと、臺所口の方から、ちようど大工の指金のような、曲りくねつた細い手が、稻妻のように伸びたり縮んだりしている。

三人わキヤツというと、眞靑になつて庭口から飛び出し、それツきり皆逃げていつてしまつた。

ぼくわその後をかたづけてから、例の通り寢床えはいり、一ト寢入りしたと思うと、胸が苦しくて

たまらない。目をさましてみると、氣味の悪い婆さんの生首が一つ、夜着の上にのつている。

エイといつて、手ではらうと、首わ蚊帳の隅え退いたが、まだこちらを睨みつけている。かまわずに寢ようとすると、また來てわ胸の上にのる。苦しいからはらいのけると、其時わちよいと退くが、寢ようとすると、また乘りにくる。はてわ飛びおきて、足で蹴飛ばすと、スウツと蚊帳をこして外えでるが、こつちが横になると、また寄つてくるのが、まるで蚊帳のないのも同じ事だ。

こんなことで、今夜わとう〳〵ろくに寢る事もできず 夜明頃になつて、欄間から日が入りかけると、生首わ何所かえ出ていつてしまつたから、そこではじめて寢ることができた。

第二十日　七月二十日

昨夜わ婆の生首のおかげで、ろくに寢られなかつたものだから、今朝わ寢坊をしてしまつた。

すると、正午頃になつて、しきりに門をたゝく者がある。それでやツと目をさまして、急いで出てあけて見たら、これわ白井の治郎左衛門さんが、丁度前を通りかゝつて、門がまだ開いていないのを、心配しておこしてくれたのだつた。何しろ化物屋敷にたつた一人いるのだから、とう〳〵取り殺されたとでも思つたのだろう。

『御親切さまにありがとうございます。實わ昨晩ろくに寢ませんので、ついこんな寢坊をしてしまいました。』

と、昨夜の話をして聞かせると、治郎左衛門さんわ心配して、

『それわよく〳〵の古狸だから、もう一度窄をかけて見なさい！　俺のしつてる十兵衛が、その方の名人だから、この頃に頼んでやらして見よう。いづれまた明日來よう。』

と、行つてしまつた。

さて今夜こそあの生首を、見事手捕にしてくれようと、ぼくわわざと寢床え入らず、座敷の眞中に坐りこんでいたが、十時わもう過ぎたと思うのに、まだ生首わ出てこない。

はてな、今日わまた別の化物かな。もう初まる頃だがと思つていると、やがて頭の上の天井が、音も立てずにだん〳〵さがつて、頭の上えかぶさつてくる。

ぼくわわざと、平氣でかまえていると、その天井が頭にさわつても、一向なんの感じもなく、いつかぼくの頭も胴も、天井の上えぬけ出してしまつた。ぬけ出したのわ、ぼくの身體ばかりでわない。側にあつた茶碗なぞも、みなスーウツと天井裏えぬけてしまつて、又その天井裏の様子が、鼠の糞、蜘蛛の巢、煤埃、それ等までが皆よく見えている。

その中にまた天井わ、しだい〳〵にせり上つてきて、ぼく達わまた元の座敷の、元の座に直つたが、天井を見あげても、どこから抜けたという穴も見えず、痕もいつこうついていない。變な事をしやがると思つたが、その中眠くなつて床に入つても、今夜わ婆の首もでゝこず、おかげで樂に寢ることができた。

第二十一日　七月二十一日

白井の治郎左衛門さんが、昨日の約束で、十兵衛わもう六十ぐらいだが、若い時分から獵が好きで、鐵砲も上手なら、穽をかけるにも妙を得ている。殊に踏み落し穽というのわ、この前大阪で傳授をうけてきたので、いかなる劫を經た古狸でも、これに掛つてわ一トたまりもない。非常な効力のあるもので、現にこの十兵衛も、尾の二股になつている、古猫の魔物さえ生捕つたといつて、自慢話をもつてきた。

そこで、ぼくわ十兵衛に、初めからの化物の様子を、委しく話して聞かせると、十兵衛わしばらく考えていたが、

『なるほど、お話の様子でわ、やつぱり狸か古猫ですな。狐わかえつて自分ぢやア、そんな眞似をしないもんです。狐てエ奴わ狡いから、劫を經た猫をつかつて、いろんな物に化けさせて、自分わ蔭で糸を引くんですが、猫の奴わその力で、いろんな物に化けるうちに、しまいにわ面白半分、だん〳〵深入りしてしまつて、とう〳〵穽にかゝつてしまうんです。ですからまづ猫を落として、それからだん〳〵と手ぐつて行きやア、化物の正體を捉まえられます。まア私にお委せなさい。きつと落として御覽にいれますから。』

と、大層な講釋をした揚句、やがて穽の支度にかゝつたが、それが出來上ると、自分わ客間の雪隱にかくれて、穽に落ちたものがあつたら、すぐに飛びだして手捕りにしようと、えらい見脈で待ち構えた。

さて宵の間わ、治郎左衛門さんもいたが、別に變つたことがない。その中歸つて行つたから、ぼくわ一トト寢入りして目をさますと、何やら人のうめく聲がする。

はてなと思つて、その聲のする方え行つて見ると、さつき十兵衛の隱れた、客雪隱の見當で聞える。

さてわ何事かあつたなと、燈火をつけてあらためると、雪隱の戸わ木葉微塵にこわれていて、十兵衛わその側にたうれたまゝ、眞青になつて正體もない。

『何の事だ、またやられたのか。』

と、ぼくわ水を持つてきて、その顏え吹つかけてやると、爺さんやつと氣がついたが、まだガタ〳〵ふるえている。

『オイ、どうしたんだ。』

云つて聞くと、十兵衛わ四邊を見まわしながら、

『何しろ驚いた。さつき此所で待ちかまえていると、急に身體がゾウツとして來たから、さてわ化物が來るんだなと思うと、恐ろしい大きな手が出てきて、この雪隱の戸と一しよに、私をつかんで引出そうとする。こちらわ聲をたてようとするのに、何しても聲が出な

い。その中に夢中になつちまいました。こりやアもうどうして、穿なんぞにかゝる奴ぢやありません。恐ろしい天狗か、山の神だ。こんな所にいた日にやア、穿どころか、命があぶない。』

と、自分がワナ〳〵ふるえながら、穿もそのまゝ置き放しにして、後をも見ずに逃げて行つてしまつた。

口ほどにもない弱い奴だと、化物もさぞ笑つたろう。ぼくだつて可笑しいやら、氣の毒なやら。おかげで雪隱のこわされ損になつて、そのまゝ今夜わ寢ることにしたが、他にわ別に怪しいこともなかつた。

第二十二日　七月二十二日

夜が明けてから、兎も角穿のところえ行つて見たら、きれいに片方にかたづけてある。

それから雪隱え行つて見ると、昨夜メチヤ〳〵に壞されていた戸が、ちつとも損じないで元のまゝになつている。

ところえ白井さんがやつてきた。

『どうだネ、うまくやつたかな？』

と、聞くから、

『うまくやられましたよ。』

と、昨夜のことを委しく話すと、

『イヤ、それわ大變な化物だぞ。こりやとても十兵衛なんぞの、手に負える奴でわないわい。それにしても十兵衛わどうした？』

と、使をだして呼びにやると、昨夜歸つたまゝ床について、ウン〳〵呻つていると云うことだ。可哀そうに、餘計なところえ顏を出して、とんだ災難をうけたものだ。

さて夜になつたが、今夜わもう誰も來ない。それで早くから床に入ろうとすると、臺所の隅の方で、何だか動く物がある。よく見ると、それわ女の首ばかりが、長い髪毛を下にし、逆さになつているのだが、切口のところが柘榴の實のようになつて、何ともいわれない物凄さだのに、顏わかえつてニコ〳〵して、ぼくの側え寄つてこようとする。

『ホヽウ、こいつわ奇抜だな。』

と、ぼくわぢつと見つめていると、また柱の根のところから、同じ樣な首が幾つも出てきて、宙を飛びながら往來するのに、その髪毛がサラ〳〵と音をたてゝ、毛槍の采配でも振るように聞こえる。

この間わ婆さんだつたが、今夜わ若い女の生首、而もそれが澤山で、代る〴〵笑いながら向つてくる。うるさいから扇子で拂えば、ちよつと退いて、又別の奴がくる。相手が多いだけ、こつちも骨が折れて、とう〳〵また寢ることができなかつた。

第二十三日　七月二十三日

昨夜のくたびれで、グッスリ晝寢をしているところえ、陰山正太夫さんがやつてきたから、昨夜の話をすると、

『それなら私の兄のところに、稀代の名刀があるから、それを借りてきて進ぜよう。戸隱山の鬼神でも、余吾將軍の名劍の威力にわ、どうしても寄りつけなかつたというくらいだから、あれならきつと效驗がある。』

と、獨り呑込んでかえつて行かれた。

その中に夕方になつたから、ぼくわ例の行水をつかつて、今夜もまた首が出てくるだろうが、誰か見物に來ないかな、など〻思つているところえ、晝間の正太夫さんが又やつてきて、

『先刻話した刀を借りてきたよ。』

と、白鞘の一刀を渡すから、

『それわ早速有がとうございました。』

禮をいつて、まづ床の間にかざり、かれこれ話をしていると、やがて例の女の生首が　臺所の方から舞いだしてきた。

ソレツというので、正太夫さんわその刀を手に取つたが、生首わ平氣で側えくるから、おのれツと

拔討ちに、忽ちその首を眞二つに切つた。

けれどもその首わ、二つになつたまゝ、まだ動いて向つてくる。正太夫さんわ驚きながらも、またその首を切りはらおうとすると、どうした彈みか柄からぬけて、身だけ彼方え飛んでいつたが、床柱にカチンとあたると、その勢で中央から。ピシリと二つに折れてしまつた。

それを見ると生首わ、ゲラ〳〵笑いながら、どことも知れず消えてしまつたが、正太夫さんわ折れた刀を拾いあげながら、

『ゴリヤ大變なことをしてしまつた。』

と、まつ靑になつて考えこんでいる。

『ほんとに飛んだことをしてしまいましたネ。』

ぼくも氣の毒でたまらないでいると、正太夫さんわ太息をつきながら、

『實わ少しでも早くと思つて、兄の留守に默つて持ちだしてきたんだ。兄が命から二番目に思つている、この大切な寶物を、私の一存でこんなことにしてしまつてわ、何とも申譯のない次第だ。この上わ平太郎、お前さんからよろしくいつてくれ。』

と、いう中に、自分の脇差をぬくと、いきなり腹え突きたてた。

ぼくわ驚くまいことか、

『これ、正太夫さん！　どうなすつたんです。あんまり短氣でわありませんか。』

と、いつても更に耳にもかけず、かえす刀で咽喉をついて、ブスリと後え五寸ばかり、その切尖をつき通し、そのまゝ死んでしまつたでわないか。

さすがのぼくも手がつけられない。しばらく途方に暮れていたが、このまゝにもできないから、その死骸を納戸えかきこんで、上から蒲團をかぶせ、座敷の血汐を掃除して、夜の明けるのを待つことにしたが、ふと考えてみると、あたら武士一人、ぼくのために切腹させてしまつたのわ、何としても氣の毒にたえない。こういう時こそ自分も一しよに、追腹を切つて死んでしまうのが、武士道の本意かとも思われたので、すでに脇差を抜きかけても見たが。——まてよ、こんなことになつたのも、元わといえば化物の仕業だ。すればその化物を退治して、正太夫さんの仇を討つてから、切腹してもおそくもあるまい。夜が明けたらこのことを、兄さんにも話して相談の上にしようと、こう考えなおすと、またぼくわ眠むくなつて、夜明までトロ〳〵とやつてしまつた。

さて朝になつてから、取りあえず納戸えいつてみると、驚いた。昨夜確にかきこんだ、正太夫さんの死骸わ影も形もない。さてわ化物にさらわれたかと、思いながらなお座敷を檢めてみるのに、更に血のこぼれた痕もない。

その上二つに折れた筈の、あの大切な名刀も見えないから、ハテナ、それでわ昨夜のわ夢だつたのか。それともあの正太夫さんわ、やはり化物が化けてきたのか。そうとわ知らず、もう少しで自分も切腹しようとした。イヤ、けんのん〳〵。

第二十四日　七月二十四日

あまり不思議でたまらないから、兎も角正太夫さんの家えいつて見た。するとかんじんの御當人わ、無事な顔で出てきて、

『イヤ、昨日わお邪魔した。』

というから、

『昨日でわない昨夜もまた、あなたわ刀を持つていらしつた筈ですが。』

と、念のために云つてみると、

『いゝや、そんなことわ知らんよ。いづれその中に名刀を持つて行くつもりだ。』

と、落ちついている。ぼくわなんだか張合がぬけて、昨夜の話をするのも極りが悪くなり、そのまゝ好い加減にして歸つてきた。

今日わ夕方まで何事もなかつた。その中に平野屋の市右衛門がきた。もつともこの頃わ物騒で、双物をうつかり出しておくと、すぐ飛びまわつてあぶないから、刀脇差わいうまでもなく、庖丁、小刀の類まで、用のない時わ櫃の中え入れて、蓋にも錠をかうようにし、客の大小まであずかつて、皆その中え入れておくことにした。

ところえまた、夜になつてから、松浦の市太夫さん、陰山の彦之丞さん、それに出入の忠六もや

つてきて、大分賑かになつてきた。

その時、市太夫さんわ、ぼくのいう通り、すぐ刀を櫃の中えいれたが、彦之亟さんわ、

『よし〳〵、今入れるよ。』

と、云つたばかりで、しばらく次の間においていたが、少し話をしてから思いだして、その刀を取りにいくと、もう鞘ばかりで身わなくなつている。

『さア大變だ。あれが今に家中飛びまわるぞ。みんな怪我しないように、御用心願います。』

と、いうと、皆青くなつて、心配そうに見まわしていると、だしぬけに臺所の方で、雷でも落ちてきたようなすさまじい音がガラ〳〵とした。

平野屋わ膽をつぶして、ヒヤアと云うと一番に庭え逃げだしたが、後の者わまだ座敷にいると、臺所からゴロリ〳〵〳〵と、音をたてながら轉げこんでくる物がある。よく見たら行水の大盥だつた。

ぼくわ急いでその盥を、湯殿の方え持つていつて、

『そろ〳〵化物が荒れだしましたから、皆さん序に見物していきますか。それとも恐けりやア、今の中にお引きとりください。』

というと、忠吉わ市太夫さんをさそつて、

『ぢやア旦那まいりましようよ。』

と、コソ〳〵と歸つていつたが、彦之亟さんわ刀がないものだから、歸ることもできないで、仕方がなしに殘つている。

けれどもほんとに刀がなくてわ、武士の分際として、夜が明けるとなお歸りにくゝなるから、今のうちに一旦歸つて、夜が明けてからまた探しにこようと、あきらめて歸ることにして、中戸口から出ようとすると、だしぬけに鴨居の上から、彦之亟さんの鼻の先え、拔身がブラリと下つてきたので、キヤツといつてそのまゝ尻餅をついた。

ぼくわおかしいのをこらえて、

『馬鹿な惡戲をする奴だ。』と、化物を叱りつけながら、その拔身をとつて鞘に收め、彦之亟さんに渡したら、初めて安心して歸つていつたが、その時天井の方で、大勢の聲でワツハヽヽと、笑う聲の聞えたのにわ、彦之亟さんまた腰をぬかしそうになつて、面白いかつこうで逃げ出したのにわ、ぼくも吹きださずにわいられなかつた。

第二十五日　七月二十五日

朝、平野屋がやつてきて『昨晩わ失禮いたしましたが、あの恐ろしい物音わ、一たい何でございました？』と聞く、

『ナニ、ありやア湯殿の大盥だつたよ。』

『そうでしたか私わまた雷さまが、戸惑でもしてきたのかとおもいました。』

こんな話をしているところえ、三井の權八や、芝の甚左衛門さんがきた。所で甚左衛門さんの話に、

『南部治部太夫さんわ、墓目の名人だから、今度わあの方を頼んで見てわ？』

と、いうことだつたが、西郷寺の御祈禱やお守札でも、なんの効驗もないのだから、墓目の法も駄目だろうと、ぼくわあまり氣乘りもしないでいるのに、

『イヤ、病人にも合藥というものがあるから、化物にも苦手がないとも限らない。なにも試しだ、明日の晩わ賴んであげよう。』と、親切にいつて歸つていつた。

今日わ少し時候あたりの氣味で、少し腹がゆるんだので、宵から二三度も便所え通つた。

ところがちようど夜半の頃だ。一ト眠りしてからフト起きて、また便所え行こうとすると、臺所の方でパチ〳〵いう音がする。

覗いて見ると、竈の中から火がこぼれて、板の間が燃えだしているでわないか。ぼくわ驚いて板の間を踏みこわし、上から水瓶の水をかけると、火わすぐに消えてしまつて、板の間わ元の通りになつたが、たゞ竈え水をかけたので、灰がそこらぢう流れだして、かえつて掃除に手古ずつた。

第二十六日　七月二十六日

ぼくが臺所の掃除をしているところえ、又權八が來たから、昨夜の火の事を話して、

『こんな事なら消さずにおけばよかつた。』と云うと、

『イヤ、消さなかつたらほんとの火になつたか知れない。まア〳〵用心がかんじんだ。それに今夜わ南部先生がお出での筈でしよう。入らしつたら知らせて下さい。』

と、云つて又歸つてしまつた。

さて夕方近くなると、芝の甚左衛門さんわ、南部先生を連れてやつて來た。先生わ用意の弓矢を大切そうに、床の間においてしばらく話をして居る所え、權八もまたやつて來たが、南部先生に、

『一體墓目の法と云うのわ、昔からよく聞く事ですが、あれで魔力を破られると、化物わ皆正體を現わすんです？』

と、質問をはじめた。南部先生わ仔細らしく

『さよう。必ずしも正體を現わすとわ限らん。たとえば狐憑なぞにあの法をもちいると、その人間が急に驅けまわつて、バツタリ倒れる。その倒れるのが狐の落ちた兆。その時今までついていた狐わ、その近所に正體をあらわすものぢや。』

と云う。

甚左衛門さんわ權八に、

『それぢやアお前わ表えまわれ！　私わ裏で待ち伏せて、化物が正體をあらわして、逃げる所を引

捉まえてやろうぢやないか。』

と云うと、權八も腕自慢の男だから、

『よろしい。やつゝけましよう。』

と、力味かえつて、自分わ槍を一本もつて、表の方え廻つて居た。その中に南部先生わ、まづ垢離を取つて身を清め、それから弓矢にも秡をかけて、いよ〳〵弦を張ろうとすると、何かわ知らず外の方から、長い物がスウと入つて來て、折角張つた弓の弦を、ブツリと切つたと思うと、長い物もカラリと落ちたが、その物音に驚いて、南部さんも弓を落してしまつた。

此時裏に居た甚左衛門さんわ、

『ソレ、逃がすな。』

と、躍りかゝつて、その長い物を切ろうとすると、それわ只の手槍であつた。

所え權八が、表から飛んで來て、

『今屋根に何か見えましたから、下りる所を待ちかまえて、圍いの壁え突きとめたと思つたら、その形わ消えてしまい、急いで槍を引こうとしたら、どうしても後え戻らず、まるで人間でも引張る様に、槍わ段々壁え入つて、とう〳〵突きぬけてしまいました。』

と、云う。そんならこれがその槍かと、皆呆れて開いた口がふさがらず。初めに威張つた南部先生も、只頭をかく計りだ。

『だから私わ初めから、無駄な事だと思つたんです。何しろ此所のわ只の化物ぢやないんですから、なまじ餘計な手數をかけるより、先方の仕たい放題をやらせて、種の切れるまで待つ他わありませんよ。』

と云うと、なるほどそれも然うだなアと、皆もしぶ〳〵手を引いて、そのまゝ歸つて行こうとする。此時天井でわクス〳〵と、さも嘲ける様な笑い聲が聞えた。

第二十七日　七月二十七日

今日わ御先祖の命日だから、朝からお墓詣に行つた歸りに、權八の所え寄つて見ると、權八わ昨夜の騒ぎから、又熱が出たと云つて居るから、大切にしろと云つて歸つて來た。此男わもと角力取なのだが、化物にわやはりかなわないと見える。

家え歸つて來ると、間もなく南部の角之進さんと、片山の正太夫さんが來たから、昨夜の話をして、

『ずいぶんいろんな惡戯をしますが、此方であまり相手にさえならなけりやア、別に害にもなりませんよ。』

と云うと、

『全くその通りだ。でわ今夜からわ化物退治なぞとわ思わず、只見物のつもりで參る事にしよう。』

と、云う事で又引取つて行つた。

その中日が暮れかゝると、この二人わ、別に眞木善六と云う人を連れて來た。

宵の中わ至つて靜なので、皆張合がぬけた樣だつたが、丁度今夜わ廿六日だから、何所でも例の月待で、何となく賑やかだ。

此時角之進さんわ、自分の邸にある柿の實を、土産に持つて來てくれたので、後に食おうと思つて、まづ盆にもつて側に置いたが、やがて夜半になつてから、眠氣ざましに食べようと思つて、その柿を取りに行くと、何時の間に誰が食べたのか、盆の上わ種計りになつて居る。

さてわ又化物にやられたかと、皆で舌打をして居ると、やがて臺所でゴロ〳〵と、又雷の樣な音がする。

皆も一時わ驚いたが、此所だと思つて我慢をして、無理に平氣な顏をして居る。そこでぼくわ手燭をつけて行つて見ると、搗臼がまん中においてある。此臼わ此前の大風に、近所の大木が吹き倒されたとき、その幹でこしらえておいたので、今まで裏の物置に入れてあつたのに、よくこんな所まで持ち出して來たと、誰も感心して居たが、

『よし、そんなら私が片づけておきましよう。』

と、云いながら手をかけたが、さも輕々とさし揚げて、裏の土間え投げ出したから、皆二度ビツクリした。

これわ權八より强いなと、ぼくも感心して居たが、他の者もこの男の力に、大きに强味が出たと見えて、皆元氣よく話し込んだ。

その中十時頃になると、天井がメキ〳〵鳴り出したが、先刻種計りになつた柿が、天井からバラ〳〵と落ちて、皆の話して居る間を、コロ〳〵と轉げまわつた。

ぼくわその中から一つ拾つて、剝こうと思つたが、例の双物わかたづけたから、剝く事が出來ない。そのまゝ押割つてガブリとやつたが、なか〳〵甘いから、食べたまえと云うのに、善六わ直ぐ取つて食つたが、他の者わ氣味惡がつて、食べ度いのだが手も出さない。

その中コロ〳〵轉つて居た柿わ、ひとりでにまた元の盆の上え、ちやんと歸つて動かなくなつてしまつた。これにわ又手を拍つて、思わず笑い出してしまつた。

その後わ別に變つた事もないので、皆もう化物の事わ忘れて、世間話や落し話に、とう〳〵夜を明かしてしまつたが、こんな事わ初めてぐあつた。

第二十八日　七月二十八日

早く起きて、昨夜善六が投げ出した、あの臼をかたづけようと思うのに、その臼の影ものこらず、只土に當つて掘れた痕が、ちやんとくぼんで殘つて居る。

おかしいから物置の中を見ると、其所に前から置いた通り、ちやんと臼わおいてあつたが、その

底に土のついて居るのを見ると、やはり投げ出されたのに相違無い。

一度食つて種計りにした柿わ、また元の通りにして返して來。一度持ち出した搗臼まで、元の所へしまつて置くなぞわ、化物もなか〳〵正直なものだと、ぼくわ何だか可愛くなつて來た。

さて晩方になると、今度わ片山の金左衛門さんが來て、昨夜の話を聞くと、

『なるほど化物も見世物だと思えば、結句面白いに相違無い。今夜わ私にも見物させてくれ。』

と、そのまゝ話し込んで居た。

その中に嫌に眠むくなつて來たので、ぼくわコクリ〳〵やつて居ると、金左衛門さんわ退屈まぎれに、ふと次の間の方を見た。すると、その部屋一面に、大きな網が張つた様になつて、その網の目ごとに、いろ〳〵な顔があらわれて、縦に長くなつたり、横に平たくなつたり、重り合つたり、はなれ〳〵になつたり、目まぐるしいほど動いて居る。

金左衛門さんわ、たまらなくなつて、

『ヒヤアはじまつた〳〵。』

と、云いながら奥え逃げ込んだ。この聲でぼくわその部屋を見ると、その網の目の顔が、此間の輪ちがいの顔より、一層無氣味に動いて、縦になると口をあき、横になると口をふさぎ、笑つたり、怒つたりする様に見える。

所え金左衛門さんわ、しまつておいた刀を持ち出して來て、その顔を斬り拂おうとするが、まるで煙を切る様に、何の手ごたえも無く、果わ一時に聲をそろえて、

『ゲラ〳〵〳〵！』

と笑いだしたので、

『もうたまらん。』

と、刀をかついで、とう〳〵庭から逃げて行つてしまつた。

『ハヽヽヽ、止せばいゝのに。』

と、ぼくわ笑いながら又見て居ると、顔わまるでシヤボン玉の様に、消えたり出たり、出たり消えたり、しまいにわ座敷も縁側も、變な顔だらけになつてしまつたが、こんな物に相手になつてたら、限りがないと思つたから、ぼくわ蚊帳え入つてねてしまつたが、蚊帳の中までも來たか何うかわ、寢てしまつて知らなかつた。

第二十九日　七月二十九日

今日わお三日（一日、十五日、二十八日）だけれど、此頃の事だから何處えも出ず、家で晝寢をして居た。日が暮れても宵のうちわ、別に人も來ず、まだ化物も出ない様だから、十時頃にわ蚊帳に入つたが、直ぐにわ寢られないので、續き物なぞ讀んで居るうち、何だか蒸あつくなつて來たから、一度涼んでから寢ようと思つて、縁側から庭え出ようとして、踏石にちよいと足

をかけると、その冷い事、まるで氷でも踏んだ様だ。
その癖いやにクニヤ〳〵して軟く、おりようとするとへんにねばつて、容易に足がはなれない。まるでモチでも踏付けた様だ。
そこでよく足許を見ると、石の面がぼんやり白くて、何だか死人の腹に乘つて居る様だが、その胴體計りが大きくて、手足わばかに小さく、その顔のある見當で、バチ〳〵と豆のはねる様な音がするから、のぞいて見ると、これわ小さな顔があつて、その眼をまた〳〵く音なのだつた。
何しろ今夜わ恐いと云うよりわ、氣味の悪い化け方をしたものだと、急いで退こうとするのに、なか〳〵足がはなれない。緣側のふちに手をかけて、ウンと云つてやつと上つたが、まだ足の裏がベタ〳〵して、歩きにくい事おびたゞしい。
その癖よくあらためて見ても、何もくつ付いて居るのでもない。それから踏石を覗いて見ると、今度わ下駄があるきりで、他にわ何もなく、只バチ〳〵云う音計りして居る。
變な事だと思いながら、又蚊帳え入つて寢たが、只例のバチ〳〵云う音計りが、それから始終耳について、それが氣になつて容易に寢つかれず、その中鷄が鳴き出す様になつて、やつとの事でトロ〳〵と寢た。

第三十日　七月三十日

朝おきてから、昨夜の踏石を見たが、やつぱり下駄丈で別に變りわない。そしてもうバチ〳〵も聞えなかつた。
晝の間わ別條無く、夕方食事をすました所え、中村の平左衛門さんが來たが、
『昨夜わどんな事だつた？』
と聞くから、あつた通りを話して、
『今迄ずいぶんいろんな事もありましたが、昨夜の足のニチヤ〳〵と、音のバチ〳〵にわ閉口しました。』
『そいつわ變つた化方だつたなア。してその顔わどんな風だつたネ？』
『何しろ暗いのでよく解りませんでした。』
『でも、大よそ誰に似てたと思う？』
『さア、何と云つたらいいでしよう。』
ぼくが考えて居ると、何者とも知れず、平左衛門の背中をポンと叩く者がある。驚いてふりむくと、側にわ誰も見えず、只彼方の天井の隅から、細い手がフワリ〳〵と下つて、段々天井えはいつて行く。それを見ると平左衛門さんわ、ワツと云つて突伏してしまつたが、ぼくが起こしたので、顔をあげた時わ、元結が切れて髷がバラ〳〵になつて居た。
けれども平左衛門さんわそんな事にかまわず、ソコ〳〵にして歸つて行つてしまつた。今迄晝間

變な事わあつたが、それわ道具が宙を飛ぶ位の事で、こんな化物の手を見せた事わ、今日が初めての事だつた。イヤ、此分なら追々増長して、今に正體を現わして來るだろうと、何だか樂しみにもなつて來た。

夕方風呂に火を起そうとして、裏の物置え炭を取りに行くと、入口の戸わ樂に開いたが、その開いた所一面に、大きな婆の顔が出た。

『ハヽア、もう出たか。』

云いながら、ぼくの方でわ別に手も出さずににらんで居ると、婆わ目玉をキヨロ〳〵させ、鼻をヒコ〳〵動かしながら、今にも物を云いそうにする。

『何だ貴樣わ！』と云つても、ニタ〳〵笑う計りで返事わない。

ぼくわじようだん半分に、火箸でその顔を突いてやつたら、まるで豆腐を刺す樣に、やわらかでブス〳〵さゝるが、それでも首わぢつとして居る。

『エイ、面倒な。』

と、ぼくわその火箸を、婆の兩方の目玉え、一本づゝ突刺してやつたが、まだ平氣で笑つて居た。ぼくわ仕方が無しに引返して來たが、それからわ家鳴がはげしく起つて、時々わ女の泣く樣な聲が、天井の方でやかましく聞こえた。

かと思うと、疊が下から持ち上つたり、風もないのに襖が倒れかけたり、明け方まで落ち〳〵寢る事も出來ない。やつぱり目玉を突刺されたので、化物も御機嫌が惡くなつたと見える。

第三十一日　七月三十一日

今日わ、少し寢坊してしまつたけれども、昨夜の顔が氣になるので、早速物置えいつて見ると、不思議なことに、昨夜あの婆の顔の、目鼻の間えさしておいた火箸わ、そのまゝ戸口の中央に、ちようどすが絲でゞも釣つてあるように、まだ宙に立つている。變だと思つてちよいとさわると、カタンといつて落ちてしまつたが、その火箸にわ絲もなければ、別に變つたところわなかつた。

それから、まづ炭を出してきて、火を起して茶を入れたりしていると、やがて雨が降りだし、それに風も交つて、横降りになつてきたから、緣側の障子のぬれないように、押入の戸をはづして立てかけておくと、その戸がひとりで躍り出すばかりに、時々家鳴りがはげしくなる。

一たいこの二三日わ、化物も增長して、晝間でもいろ〳〵な惡戲をする。この分でわ調子に乘つて、正體を現わすのも間もあるまいと、ぼくわ脇差を少しも放さず、あたりに氣を配つていた。

晝の間わ誰も來ないでしまつた。

夕方になると、ようやく雨もあがつたから、先刻の戸をかたづけて、緣側え出てみると、まだ下がジメ〳〵している。それで又内えはいつて、まだ座にもつかないうちに、今しめてきた障子が、ガラ

リと又開いたから、ふり向いて見ると、大きな手がヌツと出て、いきなりぼくを捉まえにかゝつた。
ぼくわこゝぞとばかり、抜きうちに切つて落そうとすると、それより早く手わ引込んで、バタリとしまつた。其所をすかさず、ぼくも出ようとすると、障子の外で誰とも知らず、
『まづ待て、それえまいる。』
と云うのが、尻上りの大きな聲だ。
面白い！　來るなら來いと、ぼくわ刀を取りなおして待つていると、又障子がサラリとあいて、ヌツと入つてきた者がある。
見ると、丈の高さ六七尺、鴨居の上まで首を出した、デツプリ太つた大男で、花色の帷子に、同じような社杯をつけ、腰に大小をさし、悠々と歩いて、床の間の前に坐つたところわ、いかにも人品のよい武士であつた。
ぼくわかまわず切つてかゝると、その大男わ坐つたまゝで、まるで綱で引張られるように、スウツと壁の中え消えこんでしまつたが、まだその姿わ影のように見えていて、しかも笑いながら、
『イヤ〳〵いくら騒いでも、お前なんぞの手にあうようなおれでわないぞ。けれどもお前わ頼もしい奴だから、云い聞かしておくことがある、まづその刃物をおさめ、氣を落ちつけて聞くがよい。』
と云う。
ぼくわ仕方がないから、云われるまゝに刀を鞘におさめて、

『そんなら聞こう。何事だ？』
と云うと、大男わ、再び壁の中から現われたが、その時もまた前のように、自分わちやんと坐つたまゝで、誰か後から押しだすように見えた。
さて大男わ、元の座になおると、
『こりや平太郎！　お前わなか〳〵見上げた者だな。』
と云う。
『そんな事わなんでもいゝ。一たい貴様わ何者だ？』
『おれわ山ン本五郎左衛門だ。』
『ナニ、山本……五郎左衛門。そりや人間の名だぞ。貴様わ人間でわあるまい。狐か、狸か？』
『おれわ狐狸など、そんないやしい者でわない。』
『そんなら天狗か？』
『まづ魔王の類だな。およそこの日本にわ、神ン野悪五郎という者と、この山ン本五郎左衛門と、二人の他に仲間わない。山本というから人間らしいが、おれのわ山ン本というのだぞ。』
と、云つてぼくを見つめて居るから、此方でもにらみ返していると、左の方にあつた爐の蓋が、ひとりでに舞上つて次の間えいつた。
や、又初まつたなと見ていると、爐の灰が次第に舞いあがつて、茶釜を置いたように丸くなつた

が、やがてそれから湯氣がたつて、はてわ外まで湯が沸き上り、疊の上えもこぼれたと思うと、そのこぼれが又ウヨ〳〵動くので、よく見直したらこわ如何に、皆蚯蚓になつている。

ぼくわ一たい蚯蚓だけわ、どういうものだか大嫌いだ。それを先方で承知して、わざとこんな眞似をするのだと解つたが、なにしろ一匹見つけてさえ、身の毛のよだつようなのに、こう澤山來られてわ、體がすくんで手も足もでない。

ところを見込んで蚯蚓どもわ、ニヨロ〳〵側えはつてきてわ、膝から兩腕、肩のあたりまで、遠慮なしに登つてくる。ぼくわもう氣絶しそうになつた。けれどもこゝが辛抱どころと、下腹えグツと力をいれて、少しも動かず控えていると、およそ一時間ばかりで、蚯蚓どもゝ根負をしたか、次第に後え退いてしまい。爐の釜えはいつて行つたと思うと、釜もそのまゝ灰の中え消えこみ、灰も下えと沈んでしまうと、次の間え行つていた蓋が、また歸つてきてその上を閉いだ。

と、大男わ笑い出して、

『さて〳〵お前わ氣丈な小僧だ。おれわ一たい諸國をまわつて、お前のような年頃の者の、度胸を試して居る者だが、お前のような奴にわ初めて會つたぞ。實わこの間、比熊山であつた時、此奴小癪なと思つたから、只の一度で膽を潰させてやろうと思つたが、お前があまり度胸がよいので、つい一ト月も滯留してしまつた。然し、もはやお前の度胸も、十分見屆けてしまつたから、この上わ河岸をかえて、しばらく九州え渡ることにした。今日からわもうお前の家に、何の不思議もあるまいから、皆の者にも安心させるがよい。若しまた此後、他の化物がきたら、もう山ン本五郎左衛門が來たと云え！　そうすればどんな奴でも、直ぐ手を退いて歸えるだろう。イヤ、長い間世話になつた。それでわもう參るぞ。』

と、禮を云つて、辭儀をするから、此方でもちよつと頭をさげると、大男わ立ちあがり、

『それでわ、おれの行くところを見て居れ！』

と、立ち上つて緣側え出るから、後からついて行きながら、この隙に一ト討と、刀に手をかけて見ても、大きな手で押さえつけられるようで、身體中が少しも動かない。

その中庭を見ると、何時の間に入つてきたか、立派な籠が待つて居るばかりか、その前後にわ槍、薙刀、挾箱、長柄傘などを持つた、供の家來までで、而もその家來どもわ、皆只の人間に變りわない。

第一おかしいのわ、その籠が只の大名籠だのに、五郎左衛門わ素敵な大男だから、何うして乘れるだろうと思つていると、まづその右の片足を、その籠に一寸かけながら、もう一度此方を向いて、ちよつと會釋したと見る間に、まるで籠の中え疊みこまれるように、譯もなく乘つて戶をしめてしまつた。

と、籠かきをはじめ、一同の者が一度にそこを立ちあがつたが、そのまた樣子がすこぶるおかしい。皆の片足わまだ庭をはなれないのに、他の片足わ長く伸びて、もう門の外え出ているのだ。

オヤと思う間に、行列わ宙に浮きあがつて、練つていく様子が、まるで鳥羽繪のまわり燈籠を見るようだつたが、その中次第に遠くなつて、果わ空えと舞いこんだと思うと、あとわ眞黒な晦日の空に、星が彼方此方で光つているばかりだ。

この時、漸く身體が利いて來たから、ぼくわ初めて立ちあがつたが、何だか夢のようでならない。そこで後の證據にと、そのまゝ障子を明けておいて、敷居のところに扇子を置き、それからいつもの部屋え入つて、床について寢てしまつたが、もう何の不思議もなかつたから、夜明までよく寢ることができた。

さて、おきてから、念のために昨夜のところをあらためると、障子わあけたまゝで、置いた扇子もちやんとあつたが、氣のせいかその扇子にわ、爪で引つかいたような痕がついていた。

けれどもぼくわ考えた。事によつたら、この晩の事も、やはり化物の手の一つで、こうして一旦氣をぬいておいて、それから又出直して來て、新手で惱ますのでわあるまいかと、其後も油斷なく八方に目を配つていたが、不思議なことわその時から、根を斷つたように更にない。

そこで初めて他の者にも、この晩のことを委しく話すと、皆目を圓くして聞いていたが、

『そういうえらい魔王なら、ついでに賴んで魔法を教わるか、妙藥の祕傳でも聞いておけばよいに。』

などという者があつた。

それを思うと殘念でもあつたが、なにしろ魔王なんと云うものが、實際この世の中にいるのだからどうだか、それがまだ腑に落ちない。

ついてわぼくの一生の中に、是非もう一度あの大男、山ン本五郎左衛門とか云う奴にあつて、よく素性を聞きたゞし、何のためにこの世にいて、なんのために人をおどかしてまわるのだか、それも聞いて見度いと思う。

あゝ、山ン本五郎左衛門さん、閑があつたら又遊びにおいで！　さよなら。